訂正音曲謡歌集

編

767 類
59 號
1

43207
教科書文庫
4
760
31-1905
25980
04951

267類
59号
1

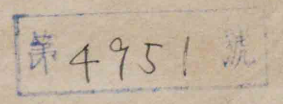
明治三十八年三月十七日
文部省檢定濟

重音唱歌集

小山作之助編

訂正 第一集

合資會社 共益商社樂器店藏版



重音唱歌集

緒言

近時音樂の普及上進に伴ひて重音式歌曲の需用益々多きを加ふるの傾向あるは必然の結果とは云へ斯道の慶事たらずんばあらず然れども倘し供給の之に副はざらんか進歩の時機を空うし發達の盛運を遲からしむるの憾あるべしこれ本書を發行する所以なり

本書題して重音唱歌集と云ふ應に二部乃至四部或はそれ以上のものをも收むべきなり然れども實用上の便宜と程度とに鑑みて二部及三部の重音唱歌に止め之を第一第二の二册に分載す

本書は家庭の娛樂に供せらるべく又學校の教科に用ゐらるべ

し而して書中重音の第一部卽ち最高音部のみを採りて單音式に吟唱するも情趣を缺損するの患なきもの尠からざれは是等は歌曲の構成と實用の場合とに稽へ必しも重音式に依るを要せず又調は唱歌者の都合により多少の上下をなすも妨なし

本書中曲譜又は歌章に作者の氏名を附記せざるものあるは一は其冀望に出で一は其未詳に因る

本書第一集は過る明治三十三年八月に發行せるものにして爾來印刷を重ぬること數回に及び世の嗜好も亦其歩を進めたるが故に今回前版より重音唱歌五曲を省きて更に新選に係る十五曲を加へ輪唱歌全部を除きて之を輪唱歌集と題する別冊に收めたり

明治三十七年二月

編者識

重音唱歌集 改正第一目次

春の部

花のあけくれ……四
春の心……六
佐保姫……八
御代の春……一〇
歸雁……一二
五月雨……一四
春の山……一六

夏の部

夏の夕……二〇
千町田……二二
茂れる森……二四
谷間の姫百合……二六

秋の部
月夜の曲……二八
秋の野……三二
秋風……三四
秋……三六
紅葉……四〇
故郷を思ふ……四二
冬の部
冬の野……四四
雪……四六
雪戰……四八
爐邊……五〇
雜の部
自助……五二
歌の德……五四
心の玉……五六
深夜の都會……五八
夢……六〇
湖上夜景……六二
天津日嗣……六四
我が國……六六
わかれ……六八
ながれ……七二
「ポチ」が墓……七四
青雲……七六
感謝……七八
子供……八〇
以上

○花のあけくれ

旗野十一郎

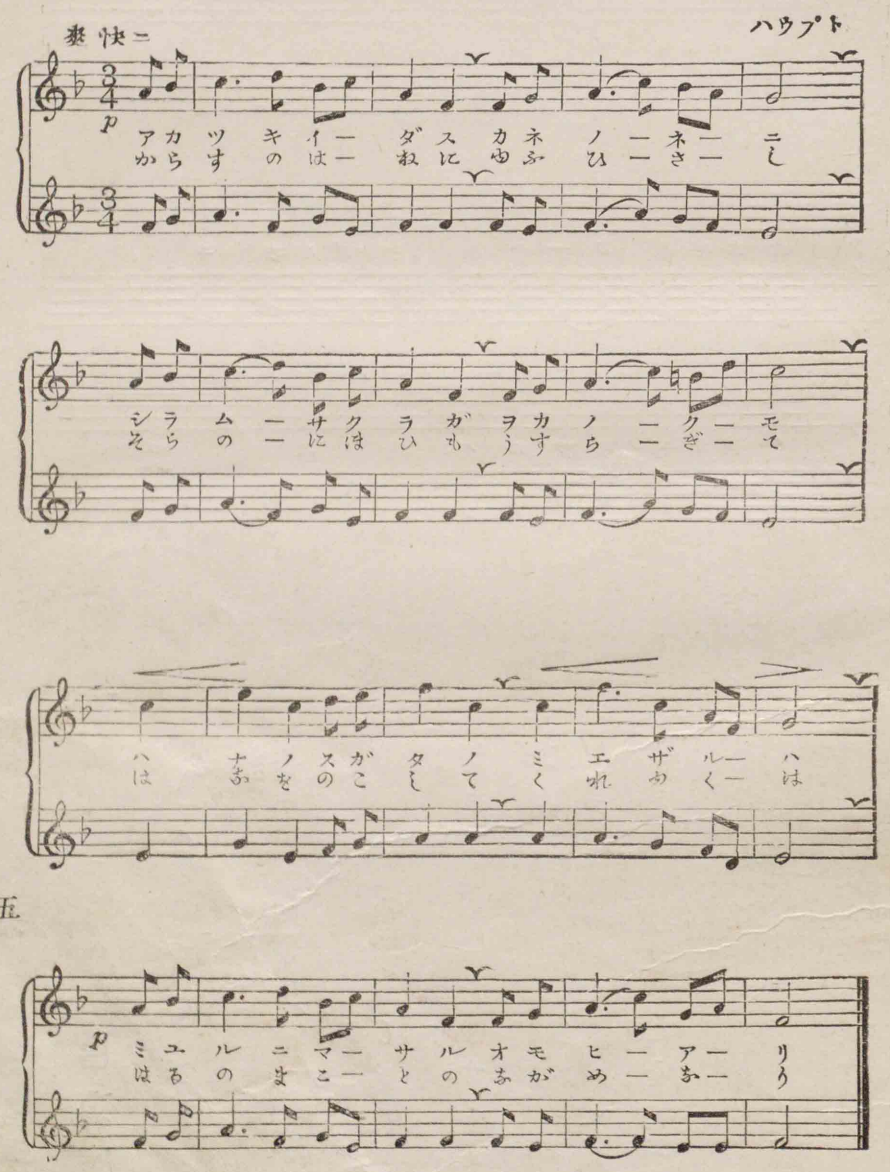
其一

○あかつきいだす、鐘のねに、
しらむ櫻が　岡の雲、
花のすがたの、見えざるは、
みゆるにまさる、おもひあり。」

其二

○からすの羽根に、夕日さし、
空のにほひも、うすらぎて、
はなをのこして、くれゆくは、
春のまことの、ながめなり。」

花のあけくれ



春の心

Moderato.

ライヂッケー

オホヰノ カーハノ ミヅノモヲ

クダスヲブネノカゲハホノカ

アレアレナガルル ハナビラニ

ワカアユムレテヨリースガル

キシベニモニユル ムラサキハ

カスミノ キヌノス ソヲソメテ

オホヰノ カーハノ ミヅノモニ

ノドカニウツルハルノココロ

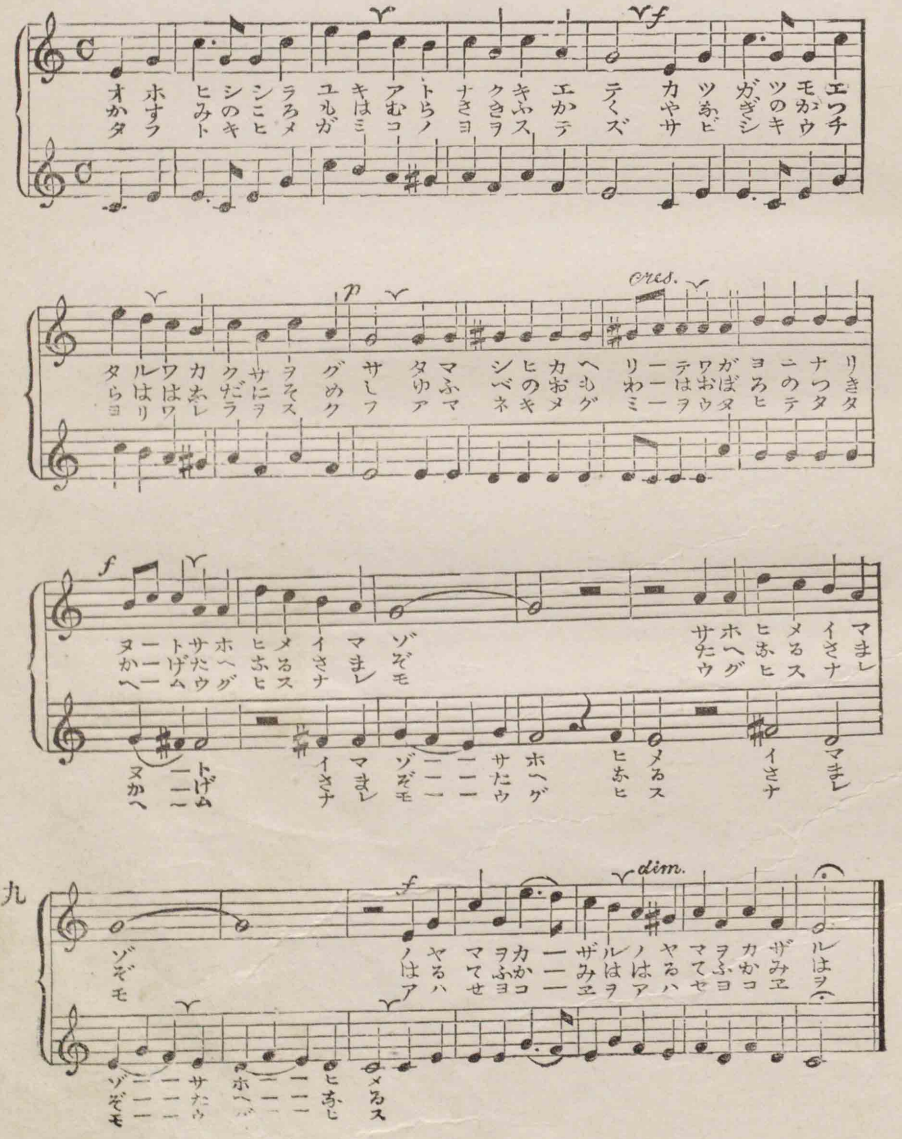
○春の心

白菊庵

大井の川の、水の面を、
下す小舟の、かげはほのか。
(甲) あれ〳〵流るゝ花びらに、
若鮎むれて、寄りすがる。
(乙) 岸べにもゆる、むらさきは、
霞の衣の すそをそめて、
大井の川の、水の面に、
長閑にうつる、春の心。

佐保姫

メンデルスゾーン



九

○佐保姫

阪正臣

一

おほひし白雪、あとなく消えて、
かつ〳〵萌えたる、若草をぐさ、
たましひ返りて、わが世になりぬと、
佐保姫いまぞ佐保姫佐保姫いまぞ佐保姫
野の山をかざる、野山をかざる。」

二

かすみの衣は、むらさき深く、
柳のかつらは、花田にそめし、
ゆふべの面輪は、おぼろの月かげ、
妙なる妙なるさまぞ妙なるさまぞ妙なる
春てふ神は春てふ神は。」

三

たふとき姫神、この世をすてず、
さびしき中より、われらをすくふ、
あまねき恵を、謡ひてたゝへむ、
うぐひすなれもうぐひすなれもうぐひす
あはせよ聲を、うぐひすあはせよ聲を。」

○御代の春

東宮鐵眞呂

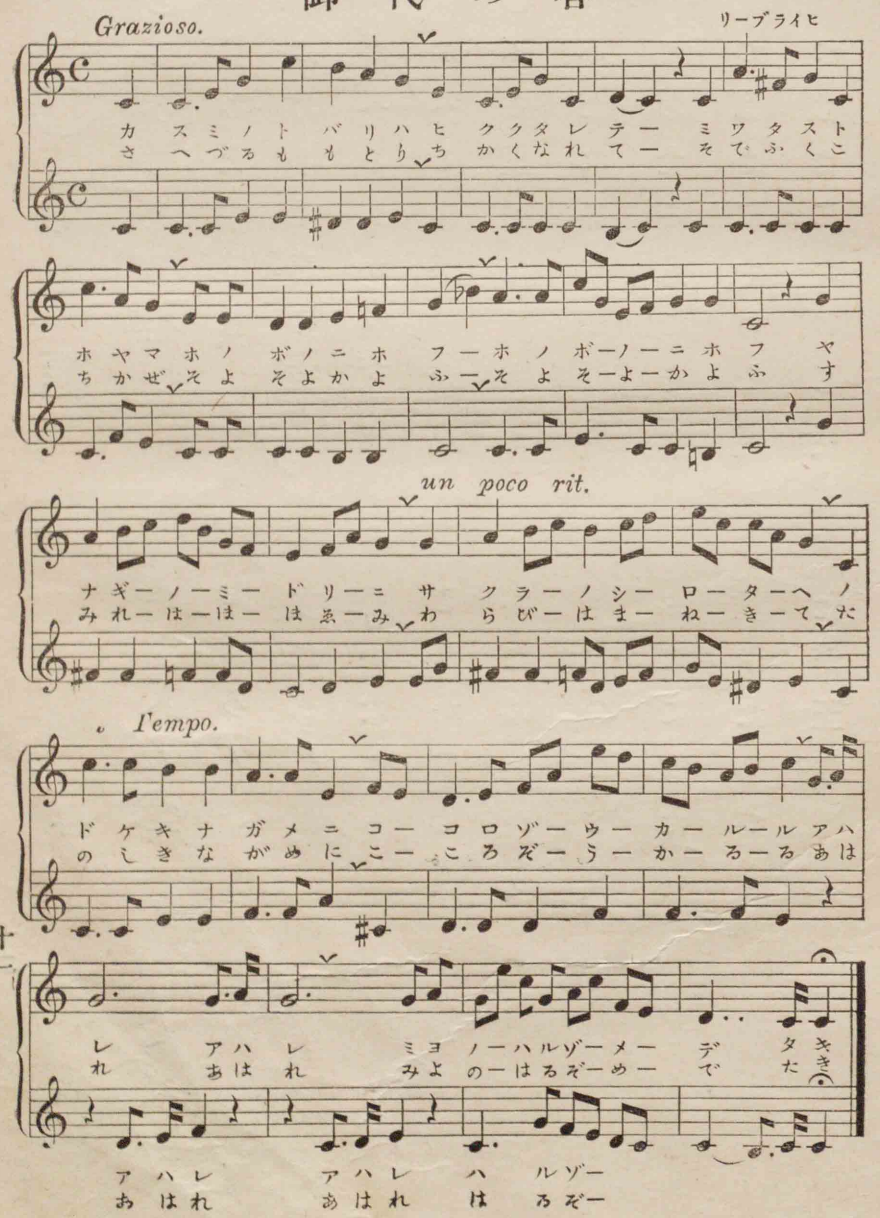
其一

かすみのとばりは、垂れて、
見渡す遠山、ひく〳〵にほふ、
柳のみどりに、櫻のしろたへ、
ほの〴〵にほふ、
のどけきながめに、心ぞうかるゝ、
あはれ〳〵、あはれ〳〵、
み世の春ぞ、めでたき。」

其二

さへづる百鳥、近く馴れて、
そよ〳〵かよふ、
そでふくこち風、そよ〳〵かよふ、
すみれはほゝゑみ、わらびは招きて、
たのしきながめに、心ぞうかるゝ、
あはれ〳〵、あはれ〳〵、
み世の春ぞ、めでたき。」

御代の春



○歸雁

谷　勤

○ころしも彌生の、
見わたす限は、
ふけゆく春の夜、
かへるかかりがね、
かへるかかりがね、

○ふる里こほくも
みだれぬすがたは、
こわたる聲こそ、
つばさにかけしは、
つばさにかけしは、

かすめる空、
おぼろ〳〵、
友にわかれ、
聲かなしも、
こゑかなしも。」
いぬるかかり、
もじのごとく、
ふねに似たれ、
誰がたまづさ、
たが玉章。」

歸　雁

感フ以テ　　ラバルレー

コロシモヤヨヒノカスメルーソーラミーワタスカ
ふるさととほくもいぬるかーかーりみーだれぬす

ギリハオボロオボロ　フケユクハルノヨートー
がたはもじのごとく　とわさるとゑてそーふー

モニワカレカーヘルカカリーガネコユカナシモ
袖にまたれつーばさまかけーしはたがたまづさ

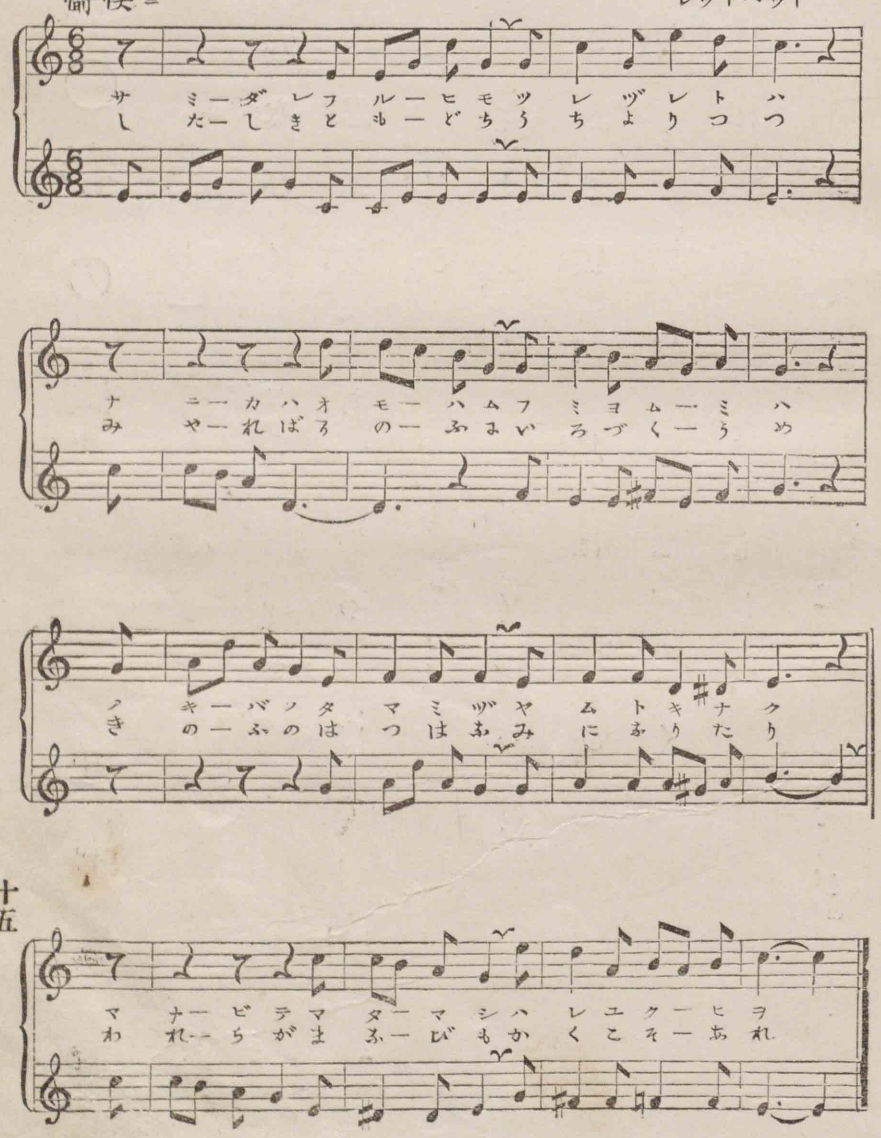
カヘルカカリガネ　コユーカナシモ
つばさまかけしは　たがーまづさ

五月雨

○さみだれ　ふる日も、つれづれ　とは、
なにかは　おもはむ、ふみよむ　みは、
のきばの　たまみづ、やむときなく、
まなびて　またまし、はれゆく　ひを。」
○したしき　こもどち、うちよりつゝ、
みやれば　そのふに、いろづくうめ、
きのふの　はつはな、みになりたり、
われらが　まなびも、かくこそあれ。」

五月雨

愉快ニ　　レッドヘッド



○春の山

中村秋香

其一

霞たなびく、春の山路を、
思ふ友どち、袖つれて、
蝶に伴ひ、蕨をりつゝ、
おくれ先だち、分けゆけば、
かをる雲に、鳥は歌ひ、
匂ふ雪に、風は吹く、
あはれ樂し、あなおもしろ、
けふのこの日、このあそび。

其二

背面影面、峯また麓、
おのがむきゝ、ゆきわかれ、
我を忘れて、うかれあふまに、
いつか高嶺に、うすつく日、
松にのぼる、夜のけはひ、
空ににほふ、月のかげ、
いざやいなむ、いざかへらむ、
おぼろ月に、たどりつゝ。

春の山

快活。

ウェーベル

カスミターナービクハルーノヤマーヂーヲオモフトーモー
そともかーげーともみねーまたふーもーとおのがむーきー

ドチソデーツレテテフーニトーモーナヒワラービヨ
むきゆきーわかれわれをわーすーれてうかーれあふ

リーツーツオクレサーキーダチワケーユケバカヨルク
ーまーにいつかたーかーねにうすーつくひまつにの

モニトリハウタヒニホフユキニカゼハフクア
ぼるよるめけはひそらにほふつきのかげい

ハレタノシアナオーモーレーロケフノコノヒコた
ざやいなむいざかーへーらーむおぼろづきにた

ノ——アソビラララララララララララララララララララ
ど——リつつららららららららららららららららららら

ララララララララララララララララララララララララ
らららららららららららららららららららららららら

ララララララララララララララララララララララララ
らららららららららららららららららららららららら

○夏の夕

中村秋香

其一

○花たちばなに、風かをりて、
ものなつかしき、ゆふべのそら、
あはれそへつゝ、鳴くほとゝぎす、
あなこゝろゆく、聲なるかな。
あゝこの聲を、思ふこもと、
かたらふのきに、聞かましかば。」

其二

○青ばにしげる、木の下かげ。
ゆふづきくらき、庭の面の、
こなたかなたに、とびかふほたる、
あなおもしろの、かげなるかな。
あゝこのかげを、おもふ友と、
ふみよむ窓に、見てましかば。」

夏の夕

Allegro.

ベリニー

ハ一 ナタチバナ一ニ一カ ゼカヲリテ一 モ一ノナツカ
あ一 をばゝし げ一る一こ のしたか げ一 も一 ふづきく

シ一キ一ユ フベノソ一 ラ アこ ハあ レた ソか へあ ツた ツま
ら一さ一ま はのおも一 ラの

ナと クホトふ びかふ トは ギたスるア あ ナあ コおコもロし ユろ一クのコか エげナあルるカ ナあ

ア一 アあ コと ノの コか エげ一ヲを一 オお モも フふ トと モも トと 二一

カふ一 タみ ラよ フむ ノま キど一ニま一 キみ カて マま シし カか一 バば

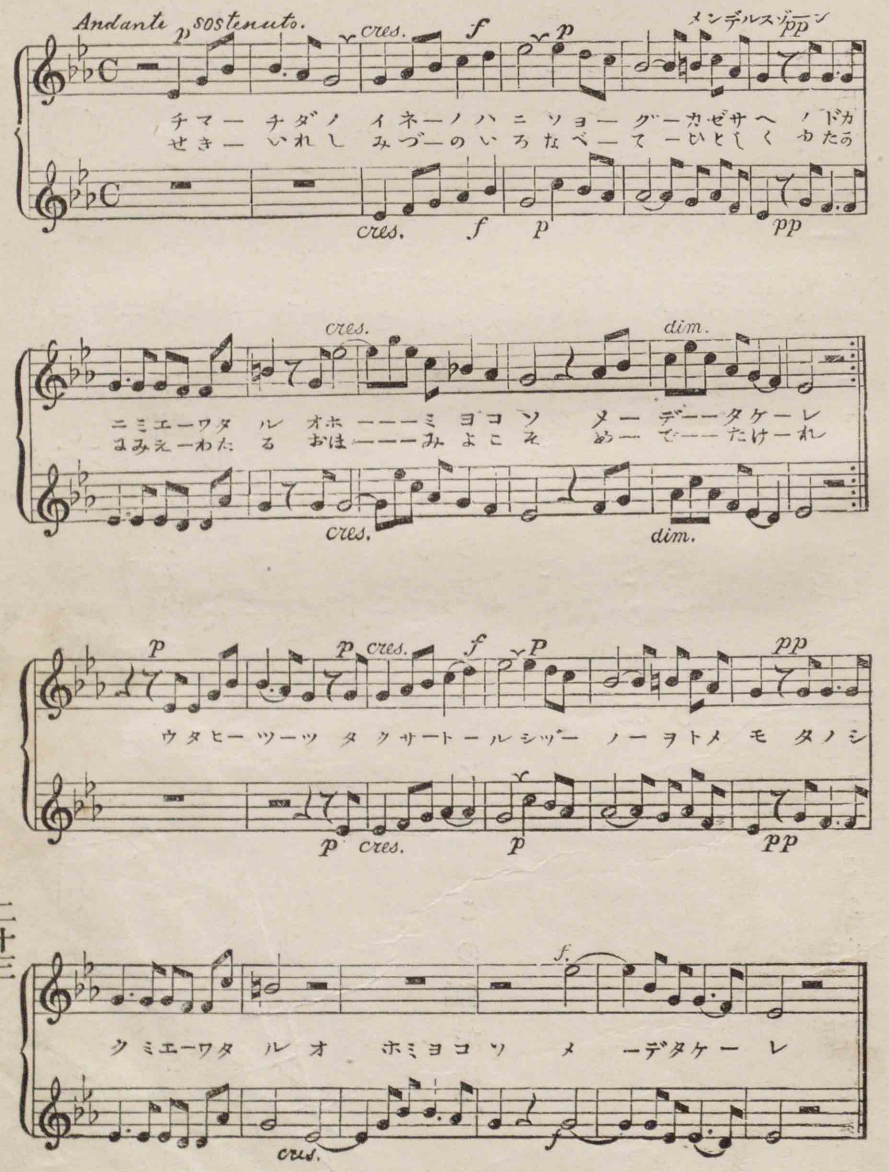
○千町田

○千町田の　稲の葉に、　そよぐ風さへ
　のごかに見えわたる。　大御代こそ　めでたけれ。」

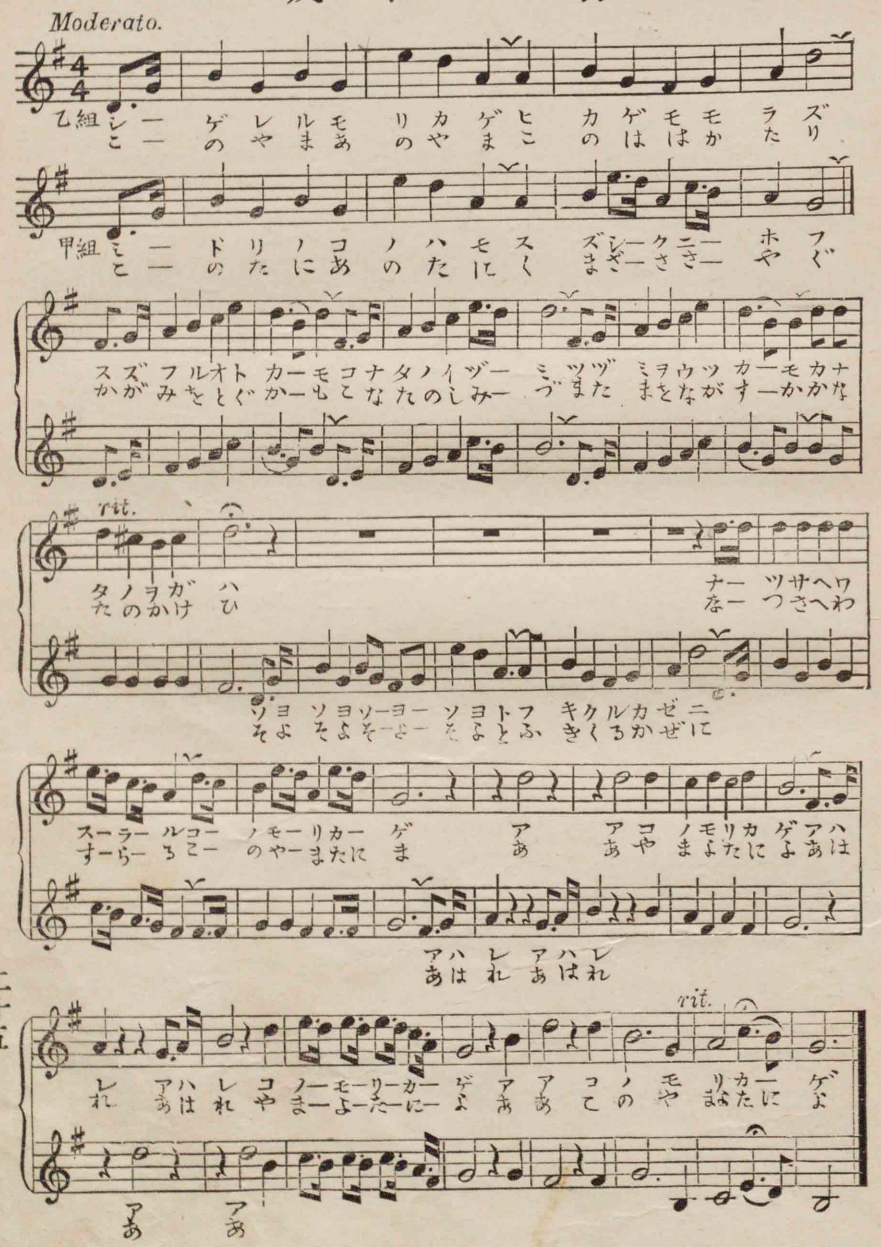
○せき入れし　水の色、　なべてひとしく
　ゆたかに見えわたる。　大御代こそ　めでたけれ。」

○謠ひつゝ　田草ごる、　賤の少女も
　樂く見えわたる。　大御代こそ　めでたけれ。」

千町田



茂れる森



○茂れる森

友田宜剛

其一

（乙組）茂れる森かげ、日影も洩らず、
（甲組）緑の木の葉も、すゞしくにほふ、
鈴ふる音かも、こなたの泉、
つゞみを打つかも、かなたの小川、
そよ〳〵そよ〳〵と、吹き來る風に、
夏さへわすらる、
あはれ、ア　この森かげ、この森
あはれ、ア　あはれ、ア　この森かげ、ア　ア　この森かげ。」

其二

（乙組）この山あの山、木の葉はかたり、
（甲組）この谷あの谷、くま笹さやぐ、
鏡をとぐかも、こなたの清水、
またまを流すか、かなたのかけひ、
そよ〳〵そよ〳〵と、吹き來る風に、
夏さへわすらる、
あはれ、ア　山よ谷よ、この山谷間、
あはれ、ア　あはれ、ア　山よ谷よ、ア　ア　この山よ谷よ。」

○谷間の姫百合

武島又次郎

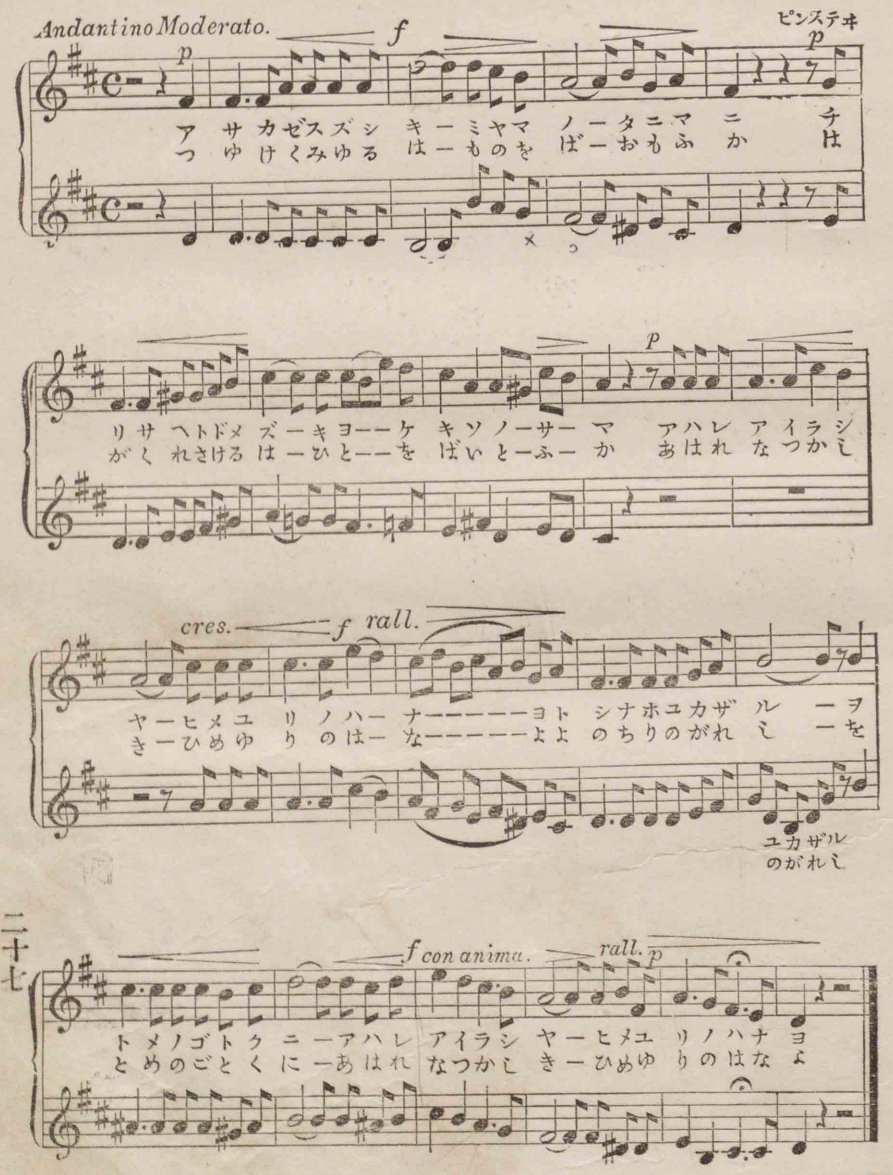
其一

朝風すゞしき、みやまの谷間に、
ちりさへとゞめず、清けきそのさま、
あはれあいらしや、姫百合の花よ、
としなほゆかざる、をとめの如くに、
あはれあいらしや、姫百合の花よ。」

其二

つゆけく見ゆるは、ものをばおもふか、
葉がくれ咲けるは、人をば厭ふか、
あはれなつかしき、姫百合の花よ、
世のちりのがれし、をとめの如くに、
あはれなつかしき、姫百合の花よ。」

谷間の姫百合



○月夜の曲

與謝野鐵幹

風清く、月あかき、
明石潟、須磨の浦、
松青く、波白き、
須磨の浦、明石潟。」
人や誰、夜もすがら、
をちかへり、笙を吹く、
影はなし、磯づたひ、
唯笙の、音のみにて。」

吹く風いよゝ、
すみゆけば、
笙の音いよゝ、
すみまさり、
てる月いよゝ、
さえゆけば、
笙の音いよゝ、
さえまさる。
風落ちて、月は入る、
あけがたの、ひきしほに、
笙の音は、沖のかた、
うすぎりに、消えてゆく。」

月夜の曲

温雅ニ　　ストランゲ

カ　ゼー　キヨクツ　キーアカキ　ア　カー　シー　ガタス　マ　ノ　ウラ
ヒ　トヤ　ターレヨ　モースガラ　ヲ　チー　カー　ヘリ笠　ー　ヲ　フク

マ　ツー　アヲクナ　ミー　シロキ　ス　マーノーウラ　ア　カ　シ　ガタ
カ　ゲハナー　シイ　ソー　ヅタヒ　タ　ダー笠ーノ　ー　ネ　ノ　ミニテ

フ　クカゼイヨヨス　ミーユケバ笠　ーノネイヨヨス　ミーマサリ

テ　ル　ツキイヨーヨサエーユ　ーケバ笠ーノネイヨーヨサ　エマサル

カ　ゼー　オチテツ　キハイール　ア　ケー　ガータノヒ　キシホニ

rit.

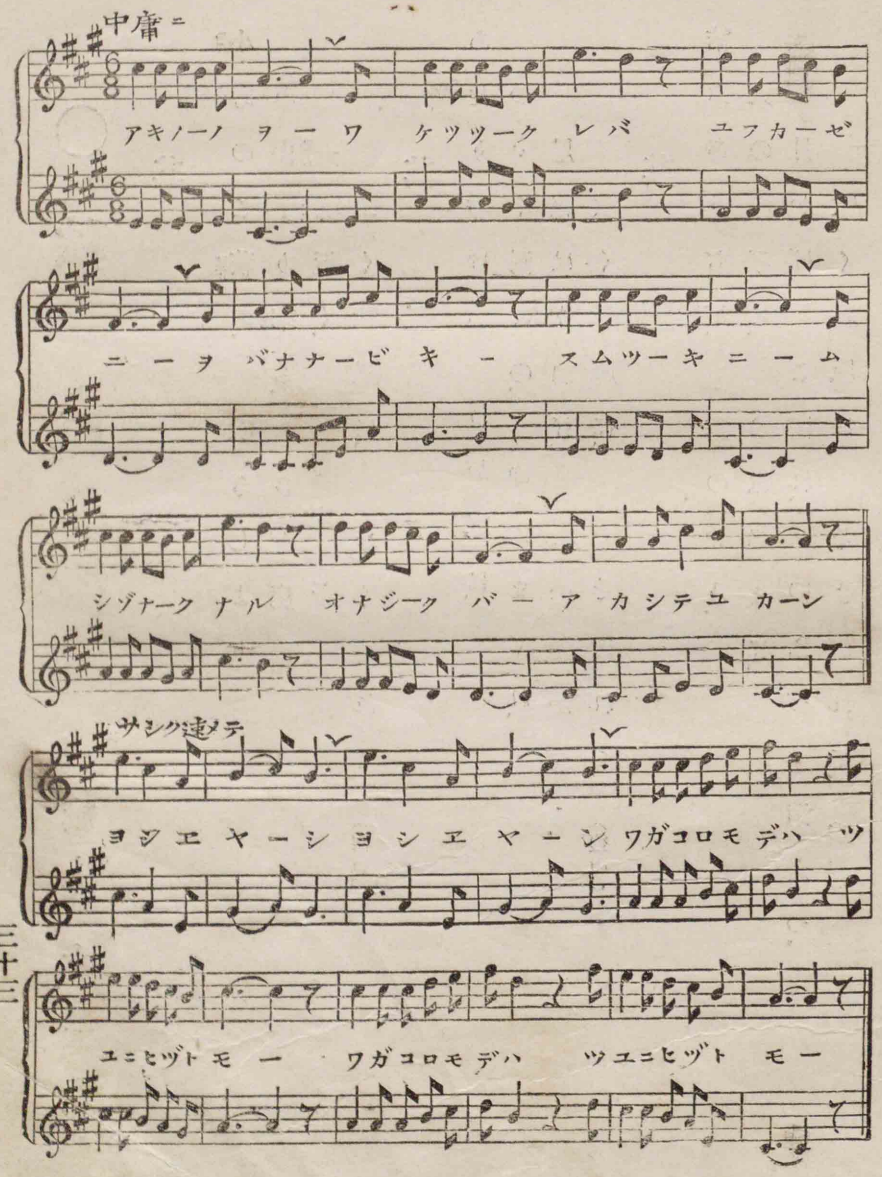
笠　ーノネーハヲ　キノカータ　ウ　スー　ギーリニキ　エテユク

○秋の野

今泉定介

秋の野を　わけつゝ來れば、
夕風に　尾花なびき、
すむ月に　蟲ぞなくなる、
おなじくば　あかしてゆかん、
よしゑやし　よしゑやし、
わが衣手は　露にひづとも。
わが衣手は　露にひづとも。」

秋の野



○秋風

旗野十一郎

其一

○小野のこ萩の、咲きしより、
み山下り來る、さを鹿の、
一聲近く、一聲遠し、
ふく秋風に、おくられて。（復唱）

其二

○あたり靜けき、わが庭に、
つゞく岡べの、ゆふまぐれ、
尾花はまねぎ、萩の葉かたる、
吹く秋風に、さそはれて。（復唱）

其三

○結ぶあさぢが、露のたま、
人の何ぞと、とはぬまに、
月かげ、こぼれ、ゆふづゝ消えつ、
吹く秋風に、そよがれて。（復唱）

秋風

Andante con moto.

レンツ

ヲあム ノたス ノりブ ハづサ コしア ギけヂ ノきガ サわソ キかユ ニニノ ニニニ ニニニ シまヌ ヨはタ リにマ

ミつヒ ヤづト ヤくノ ニニニ オをナ リかニ クべゾ ルのト サわト ヲふハ ニニニ シまヌ カぐマ ニニニ ノれニ

p ヒをツ トぱキ コあカ ニニニ エはゲ ニニニ チまコ ニニニ カねボ ニニニ クぎレ

p ヒをユ トぎフ コのヅ ニニニ エはツ ニニニ トかキ ニニニ ホたエ ニニニ シるツ

フふフ クくク アあア キきキ カかカ ゼぜゼ ニにニ サつソ ソかヨ ハはガ レれレ テてテ

フふフ クくク アあア キきキ カかカ ゼぜゼ ニはニ オさソ クそヨ ラはガ レれレ テてテ

○秋

中村秋香

其一

秋たちし、けしきは、
目にも又、耳にも、
おのづから、しらるゝ、
此ごろの、明くれ、
萩におく、あさつゆ、
荻に吹く、ゆふ風、
あゝ、あゝ。」

其二

けふよりの、あはれぞ、
げにおもひ、やらるゝ、
野邊に又、山邊に、
すだく蟲、なく鹿、
さきそむる、八千草、
そめかくる、もみち葉、
あゝ、あゝ。」

秋

ルビンスタイン

Moderato.

アーキタチシケ　シキハー　メーニモマタミ　ミニモ

コ——ノゴロノア　ケクレ

オノヅカラシ　ラルルーー　コノゴ　ロノア　ケクレ

ハーギニ　オクーーアサー　ーーーーーーツ　ユ

ハギニオ　クアサ　ーーーー　ーツユ

ヲ　ーギニフクーユフ　ーカ

ヲーギニフクーユフ　ーーーーカ

ゼ　アアーーーーアア　ー

ゼ　ー

ケーフヨリノア　ハレゾー　ゲーニオモヒヤ　ラルル

ス　ーダクムシナ　クシカ

ノベニマタヤ　マベニーー　スダクムシナ　クシカ

サーキリム　ルーヤチ　ーーーーーーグ　サ

サキリム　ルーヤチ　ーーーー　ーグサ

ソメカ　ークルーモミ　ーギ

ソメカークルモミ　ーーーーギ

ritard.

バ　アアーーーーアア　ー

バ　ー

○紅葉

東宮鐵眞呂

其一

あしたのつゆじも、ゆふべのしぐれの、
こずゑをいろどり、下枝を染めわけ、
さらすはにしきか、おれるは綾かも、
山ひめの心づくし、おもしろの秋のいろや、
似るものもしらず、及くものもあらじ。」

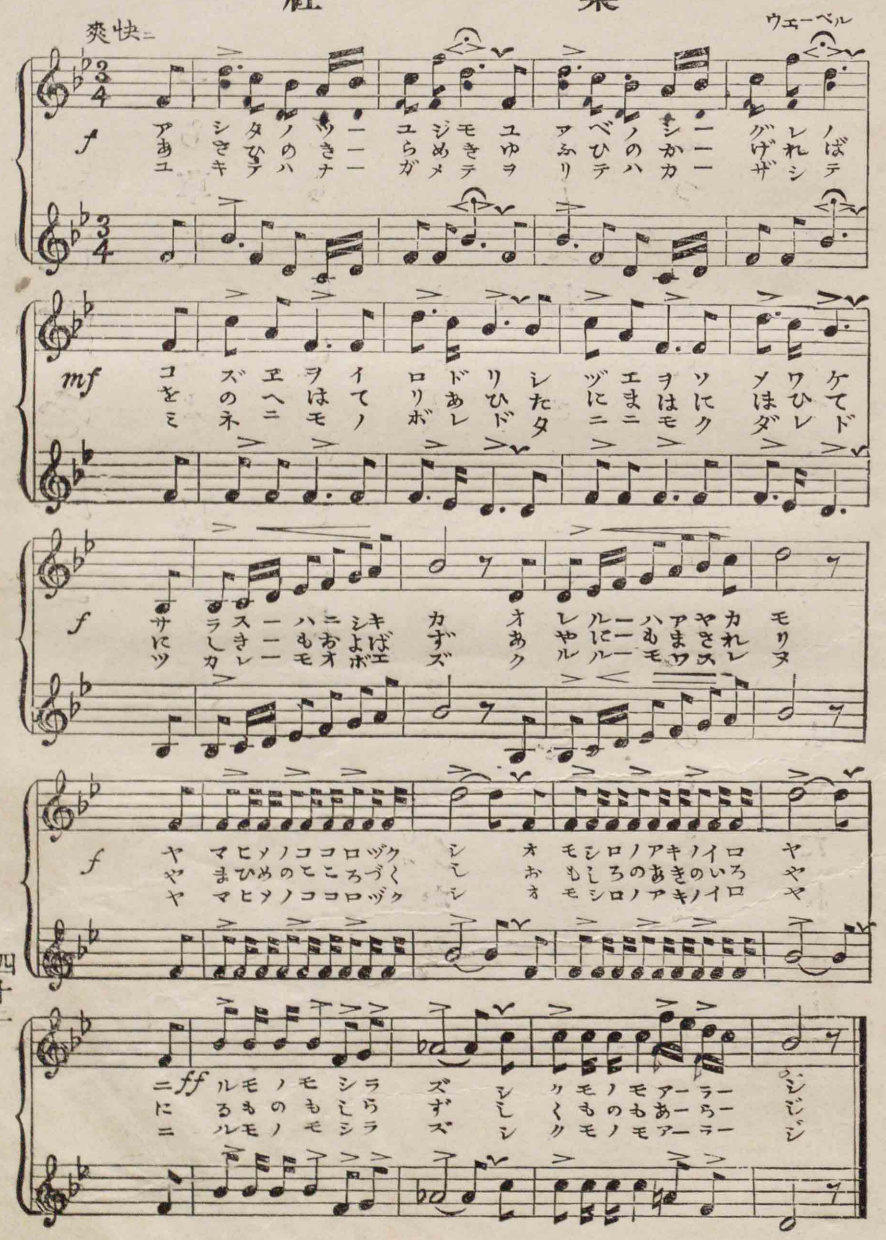
其二

あさ日のきらめき、夕日のかげれば、
尾の上は照り合ひ、谷間は匂ひて、
にしきも及ばず、あやにもまされり、
山ひめの心づくし、おもしろの秋のいろや、
似るものもしらず、及くものもあらじ。」

其三

行きてはながめて、折りてはかざして、
峯にものぼれど、谷にもくだれど、
つかれも覺えず、暮るゝも忘れぬ、
山ひめの心づくし、おもしろの秋のいろや、
似るものもしらず、及くものもあらじ。」

紅葉



故郷を思ふ

感ヲ以テ　　ベリニー

ヤチグサニ　ソヨグカゼ　シラツユニ　ヤドルツキ

Cres.　dim.

ワガソデモ　タダナラヌ　ーーユフベーカーナ

dim

コヒシチーチー　ハーハ　トホシフールー　サート

mf　P

ナツカシキ　カーナタノ　ーーアーリーサーマ　ツ

P

PP　Poco ritenu

キヨウツセカシ　カゼヨカタレカシ

PP　Poco riten

○故郷を思ふ

やち草に、そよぐ風、
しらつゆに、やどる月、
わが袖も、たゞならぬ、夕かな。

こひし父母、こほしふるさと、
なつかしき、かなたの、ありさま、
月よ、うつせかし、風よ、かたれかし。

○冬の野

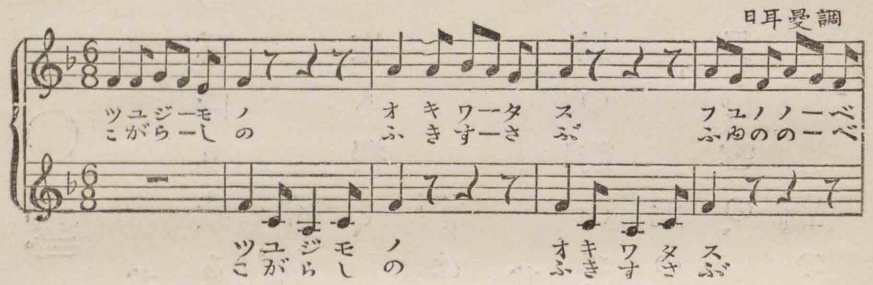
其一

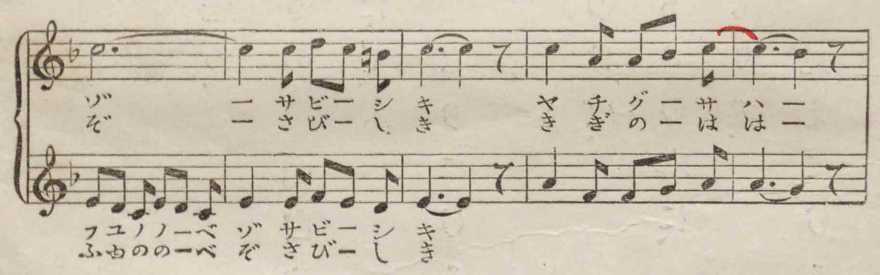
○露霜のおきわたす、
冬の野べぞ　さびしき。
八千草は　うら枯れて、
啼く蟲も　聲たてず。」

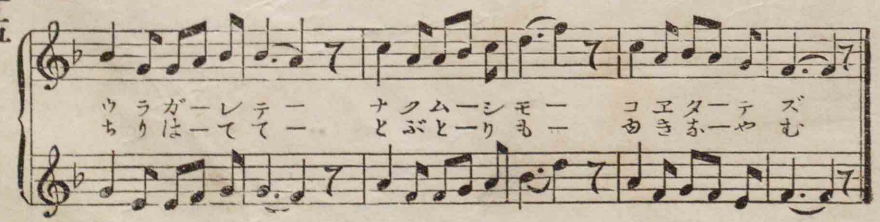
其二

○木枯の　吹きすさぶ、
冬の野べぞ　さびしき。
木々の葉は　散りはて、
飛ぶ鳥も　行きなやむ。」

冬の野







○雪

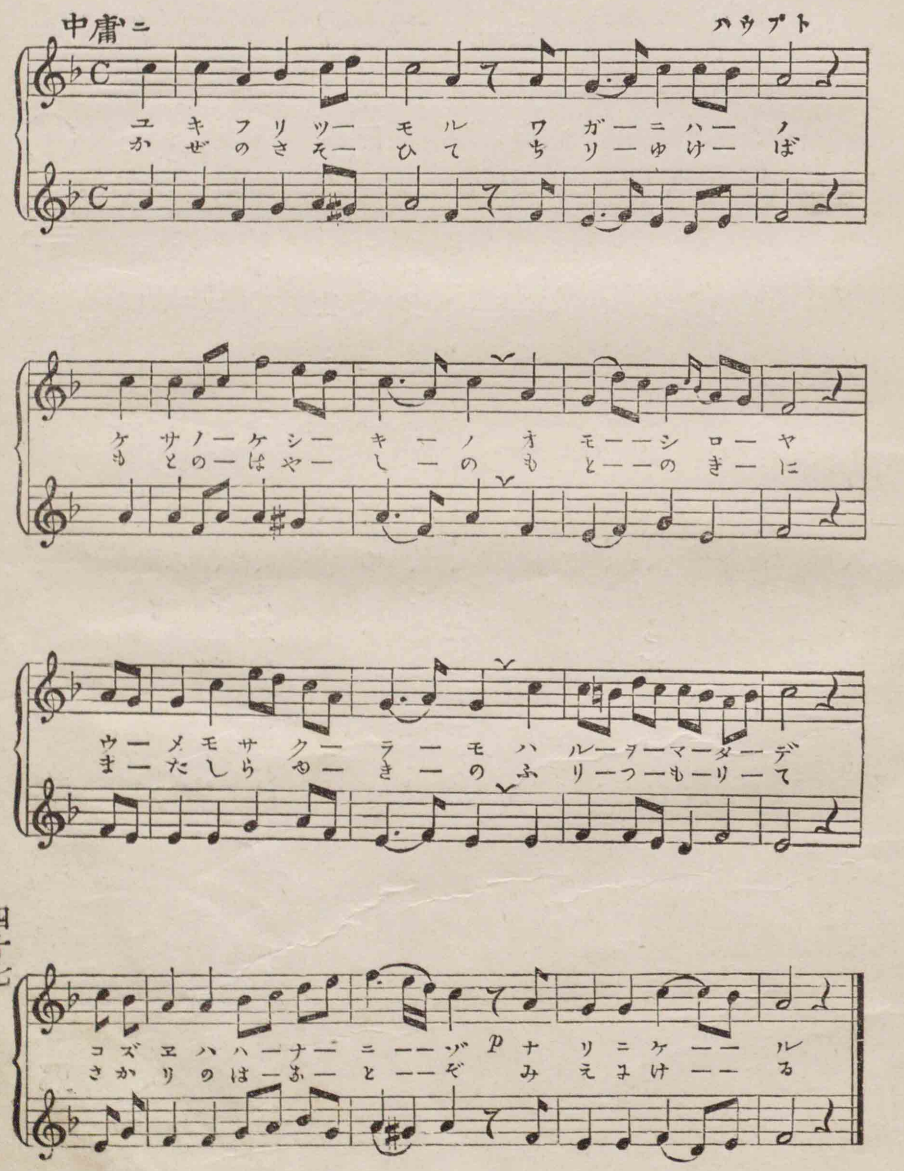
其一

○雪降り積る、わが庭の、今朝のけしきの、面白や、
梅も櫻も、春をまたで、梢は花にぞ、なりにける。」

其二

○風の誘ひて、散りゆけば、元の林の、もとの木に、
又白雪の、降りつもりて、盛の花とぞ、見えにける。」

雪



○雪戰

旗野十一郎

一

其

白銀しきたる、岡に原に、
ふりこそまされ、今朝のみ雪、
イザゆけや、、、ゆけや、、、歩調揃へ、
イザすゝめ、、、すゝめ、、、豫定の場所に。」

二

其

おの〳〵陣どる、彼方此方、
合圖の哄こそ、雪に冴ゆれ、
ソレねらへ、、、ねらへ、、、つよきを的に、
ソレうてよ、、、うてよ、、、かためし玉を。」

三

其

飛交ふ白玉、空にひゞき、
たゝかふ聲々、風にきほふ、
サ、なげよ、、、なげよ、、、ちからをこめて、
サ、さけよ、、、さけよ、、、からだを輕く。」

四

其

心はとけあふ、雪のあそび、
敗ても勝ても、いさぎよしや、
ア、うれし、、、うれし、、、たがひの手柄、
ア、たのし、、、たのし、、、語るも聽くも。」

雪戰

ニたきび　キれつや
ラなどそ　ユゆホし
ハこヒあ　ミさキよ
ニたニの　ノにニぎ
カなラき　サきぜさ
ヲかソゆ　ケゆカい
ルろマー　レそエも
タどタあ　レこゴて
キんラけ　サきエち

一一一一　一一一一
シぢシと　マとコか
ネの一は　ソの一も
一一一一　一一一一
ガおカろ　コづカて
ロのビこ　リひタけ
シおトこ　フあタま

ロとメが　ヤヘヨし
ソまコて　ケらゲれ
ミをヲの　ユねナう
ナきラひ
シよカが
アつテた

ヤヘヨし　ヤヘヨし
ケらゲれ　ケらゲれ
ユねナう　ユねナう

ヘにテら
ザれサあ
イそサあ

ヤヘヨし　ヤヘヨし
ケらゲれ　ケらゲれ
ユねナう　ユねナう

四十九

ニをクも　ショロく
ショロく　バたカき
バたカき　ノしヲも
ノしヲも　メめダる
メめダる　ダたラた
ダたラた　サかカか
サかカか

メよヨし　メよヨし
スてケの　スてケの
スうサた　スうサた

ザれサあ
イそサあ

メよヨし　メよヨし
スてケの　スてケの
スうサた　スうサた

○爐邊

其一

野山も草木も、うづもれはて、
白雪降りつむ、み冬の夕、
爐のもとかこみて、親子はら
語らふ團居は、のどけくたのし。」

其二

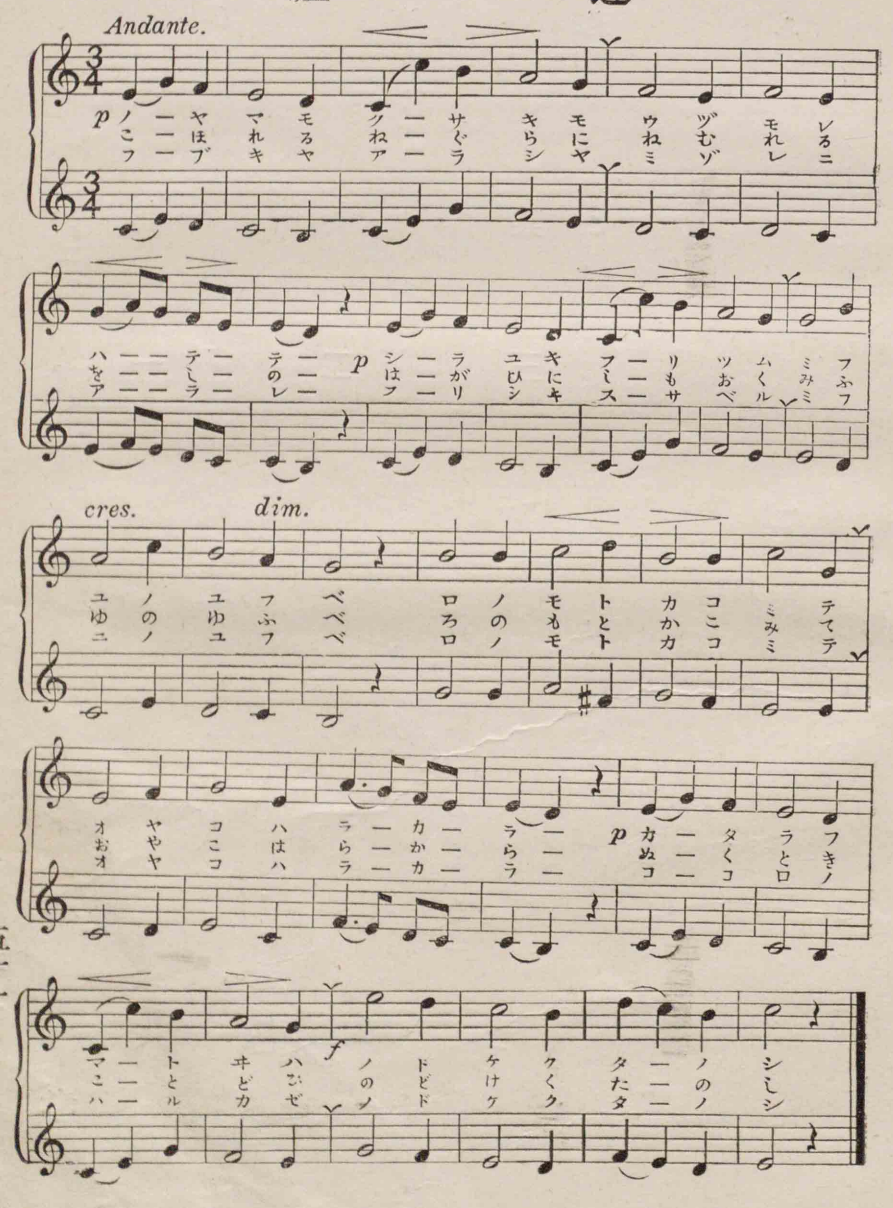
氷れるねぐらに、眠れる鴛鴦の、
羽交に霜おく、み冬の夕、
爐のもとかこみて、親子はら
溫ときことぐひ、のどけくたのし。」

其三

吹雪や嵐や、みぞれにあられ、
降りしきすさべる、み冬の夕、
爐のもとかこみて、親子はらから、
こゝろの春風、のどけくたのし。」

友田宜剛

爐邊



○自助

鈴木忠孝

其一

みづから助け、勉めなば　他には依頼る、　要なけむ、
蟻すらわれと、　營むものを、　弱くてならじ、　人の意志。」

其二

勉めてやまぬ、　その時は、　譽の冠、　戴かむ、
空しき囊、　眞直に立たず、　只管進め、　わが路を。」

其三

忍耐勇氣、　これ寶、　たゆまぬ心、　ふり起せ、
信せよわれを、　頼むな他を、　かくてぞとげむ、　わが思ひ。」

其四

みがけば玉も、　光あり、　意志だに強く、　わが持たば、
天才こゝに、　光を放ち、　なす業遂げむ、　疑ふな。」

自助

快活ニ　ストランク

バはラリ　ナきカあ　一一一　メと夕り
ツそコひ　トのしか
ケぬきも　スヨウニ　一一一　タやフた
ラてイば　一一一　カめタイ　ヅトガ　ミつミみ

ムかば　ケかコた　一一一　ナだスも
ルりロく　ヨむコよ　一一一　タかコつ
ウいつわ　エ
一たりが
ハのヌに　一一一　ニれマだ　トまユし　ヒほタい

ヲずヲち　ノたトな　モたヒは
一一一　ムひナを　ナぐムり　トすフか
イまタひ
トろヲに　レくレこ　ワふワと
ラきヨい　一一一　スしゼき　リなンん　アむシて

シをヒな　イちモふ　一一一　ノみぞが
トがガた
ヒわワう
ジめムむ　ラすゲげ　ナすトと
テらゾざ　一一一　クすテわ　ハたタす　ヨひカな

○歌の徳

落合直文

其一

花の梢に、なくうぐひす、
すむ蛙も、のどけき春を、
さやけき秋を、よばふならん、
きくにつけても、人はうたはで、
ながれの底に、めづるならん、
その聲々を、あらるべしや。」

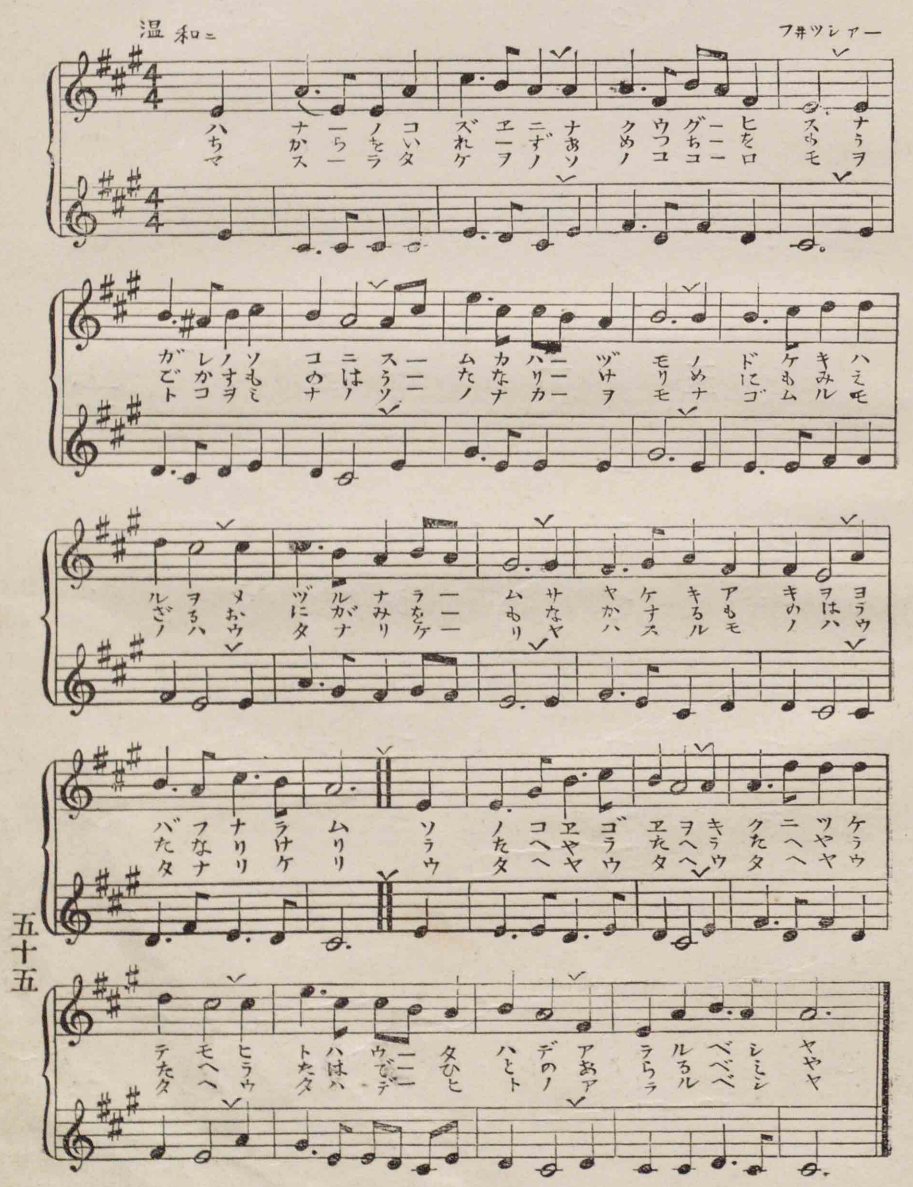
其二

力をいれず、天地をも、
歌なりけり、目にも見えざる、
なかするものは、うたなりけり、
うたへやうたへ、うたはで人の、
うごかすものは、鬼神をも、
うたへやうたへ、あらるべしや。」

其三

ますら武雄の、そのこゝろも、
その中をも、和むるものは、
柔するものは、うたなりけり、
うたへやうたへ、うたはで人の、
男女の、うたなりけり、
うたへやうたへ、あらるべしや。」

歌の徳



○心の玉

小原燕子

其一

螢もよるを、てらすなり、
趙氏が玉も、なにかせむ、
心のたまを、みがきてぞ、
國の光と、なりなまし。」

其二

「つもればゆきも、よをてらす、
卞和が玉も、なにかせむ、
心のたまを、みがきてぞ、
國の光と、なりなまし。」

心の玉

温和ニ　オンスロー

ホタルモ　ヨルヲ　テラスナラ　リー
つもれば　ゆきも　よを　てらす　すー

テゥーシガ　タマモ　ナニカセ　ムー
べんなが　たまも　なにかせ　むー

ココロノ　タマヲ　ミガキテ　ゾー
こころの　たまを　みがきて　ぞー

クニノヒ　カリト　ナリナマ　シー
くにの　ひかり　とな　りなま　しー

○深夜の都會

佐々木信綱

其一

○煙突よりもらす、苦しびの、
黑き歎息も、やみにけり、
走る車が、悲しびの、
高きさけびも、こだえけり。」

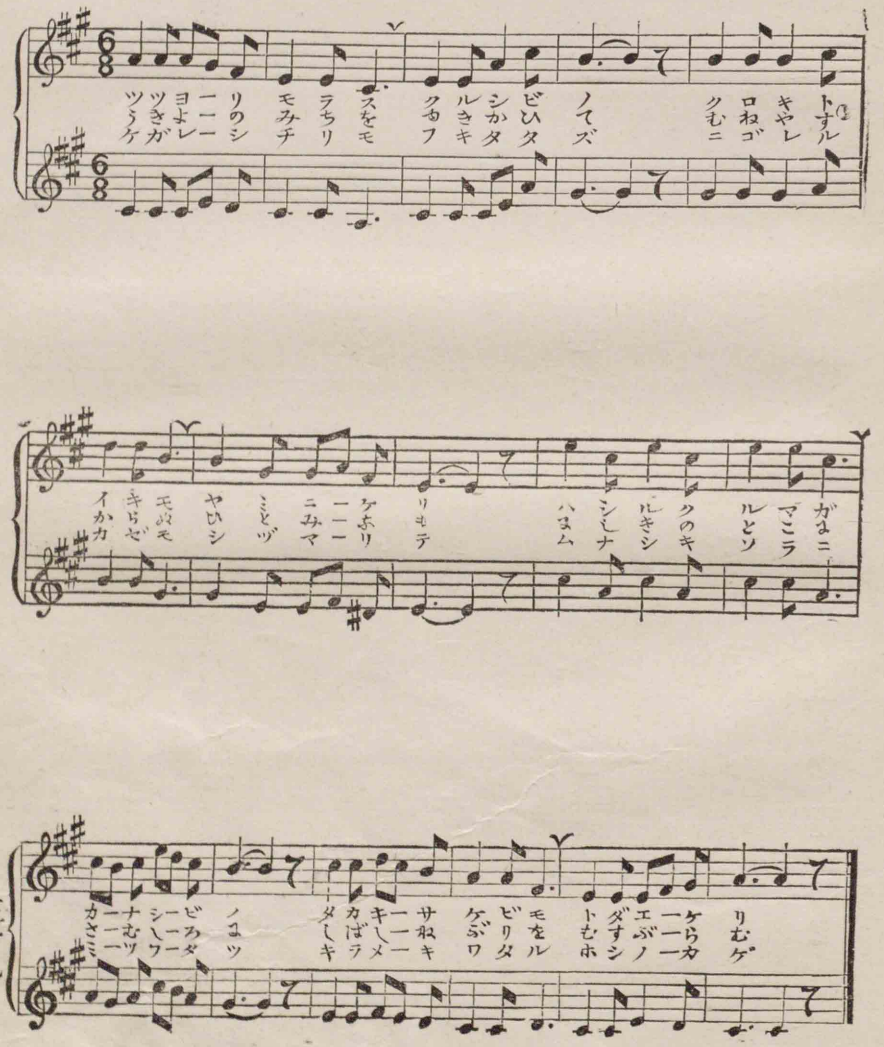
其二

○うき世の道を、ゆきかひて、
胸やすからぬ、人みなも、
錦のここに、さむしろに、
しばしねぶりを、結ぶらむ。」

其三

○けがれし塵も、吹きたゝず、
にごれる風も、しづまりて、
むなしき空に、三つ二つ、
きらめきわたる、星のかげ。」

深夜の都會



○夢

旗野十一郎

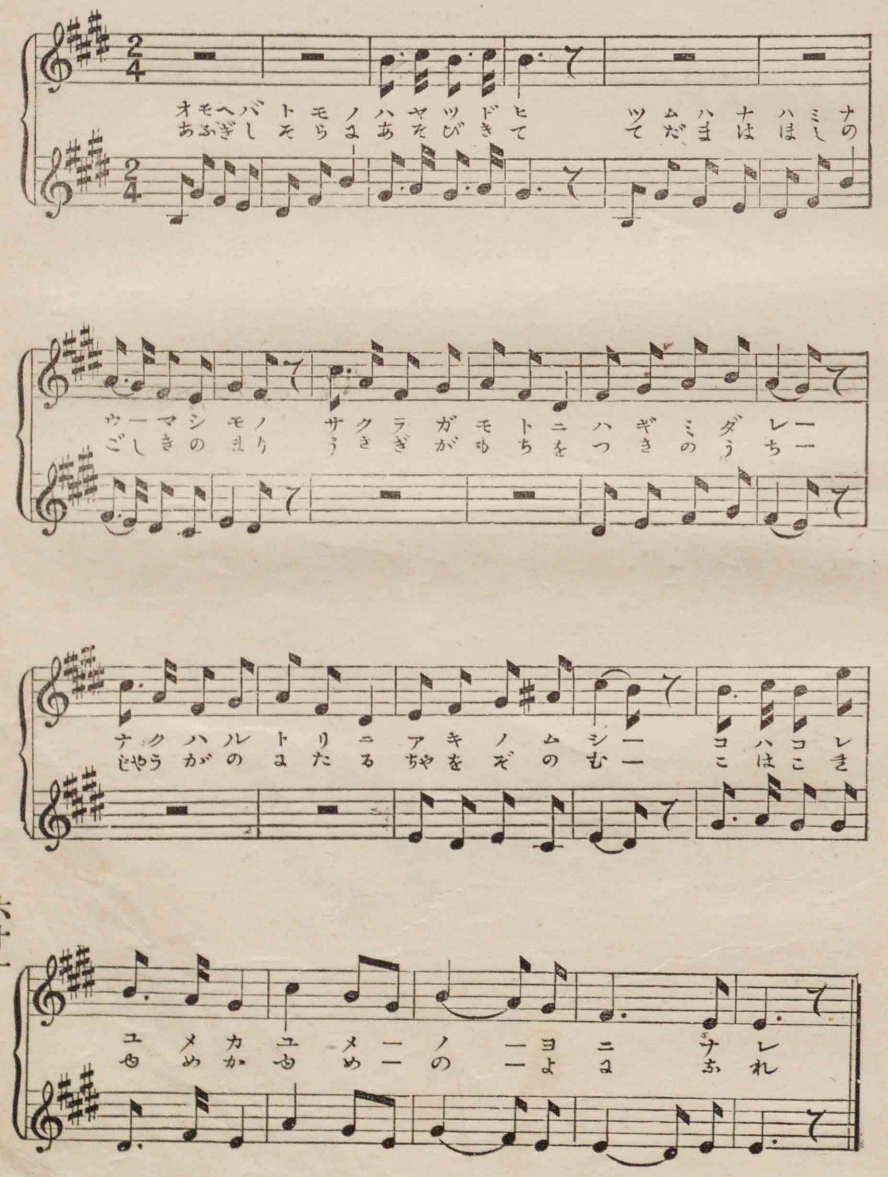
其一

○思へば友の、はやつごひ、摘む花は皆、美味物。
櫻がもとに、萩みだれ、
啼く春ごりに、秋の蟲。
こはこれ夢か、夢の世になれ。」

其二

○仰ぎし虚に、遊び來て、翫物は星の、五色の毬。
兎が餅を、月のうち、
嫦娥の煎たる、茶をぞ呑む。
こはこれ夢か、夢の世になれ。」

夢



○湖上夜景

谷　勤

其一

○さゞ波よする、大海の
浦風なぎし、沖にへに
たゝし小舟、うかぶなり
海士こそ夜網、ひくならし」

其二

○苫屋の火かげ、更けはてゝ
つまよぶ鴉の、聲かなし
なかすの蘆の葉がくれに
すなどるふねや、出でつらむ」

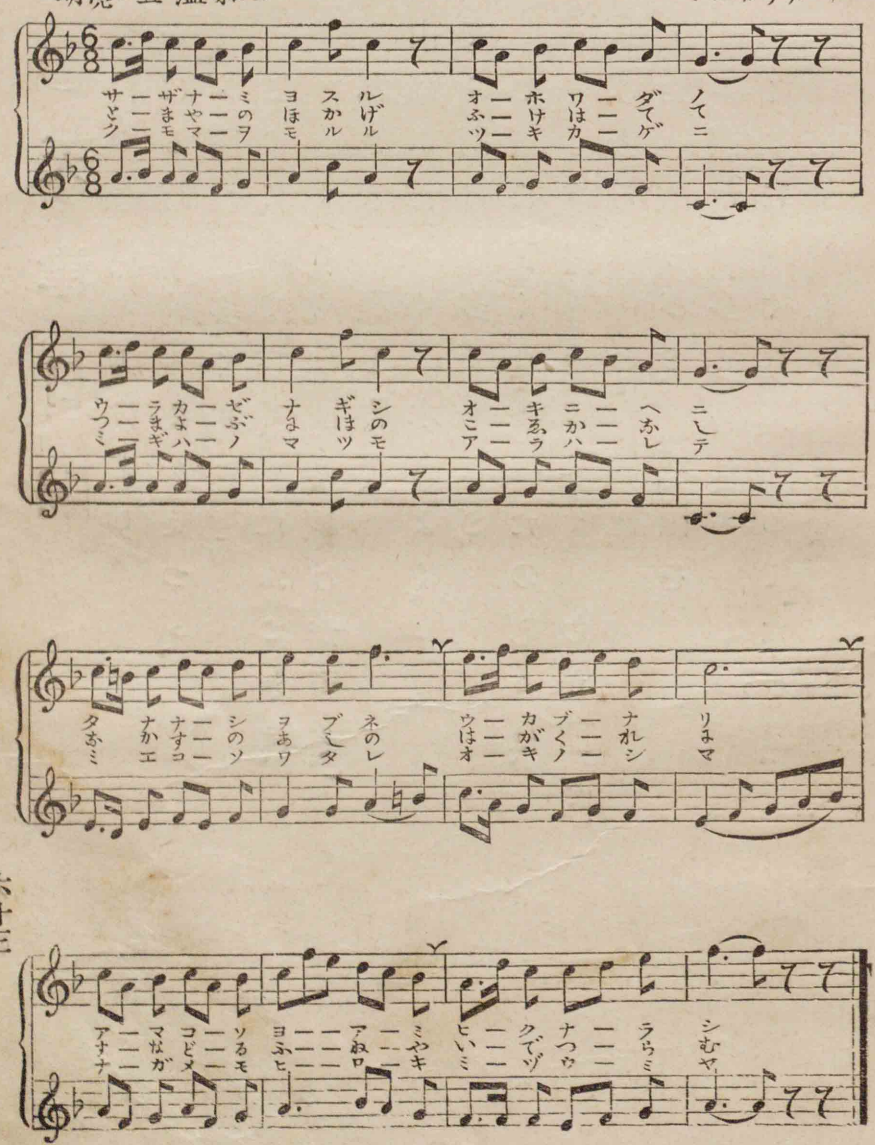
其三

○くも間をもるゝ、月影に
汀の松も、あらはれて
見えこそわたれ、沖の島
ながめも廣き、みづうみや」

湖上夜景

明亮ニ且温和ニ

ツエルテル



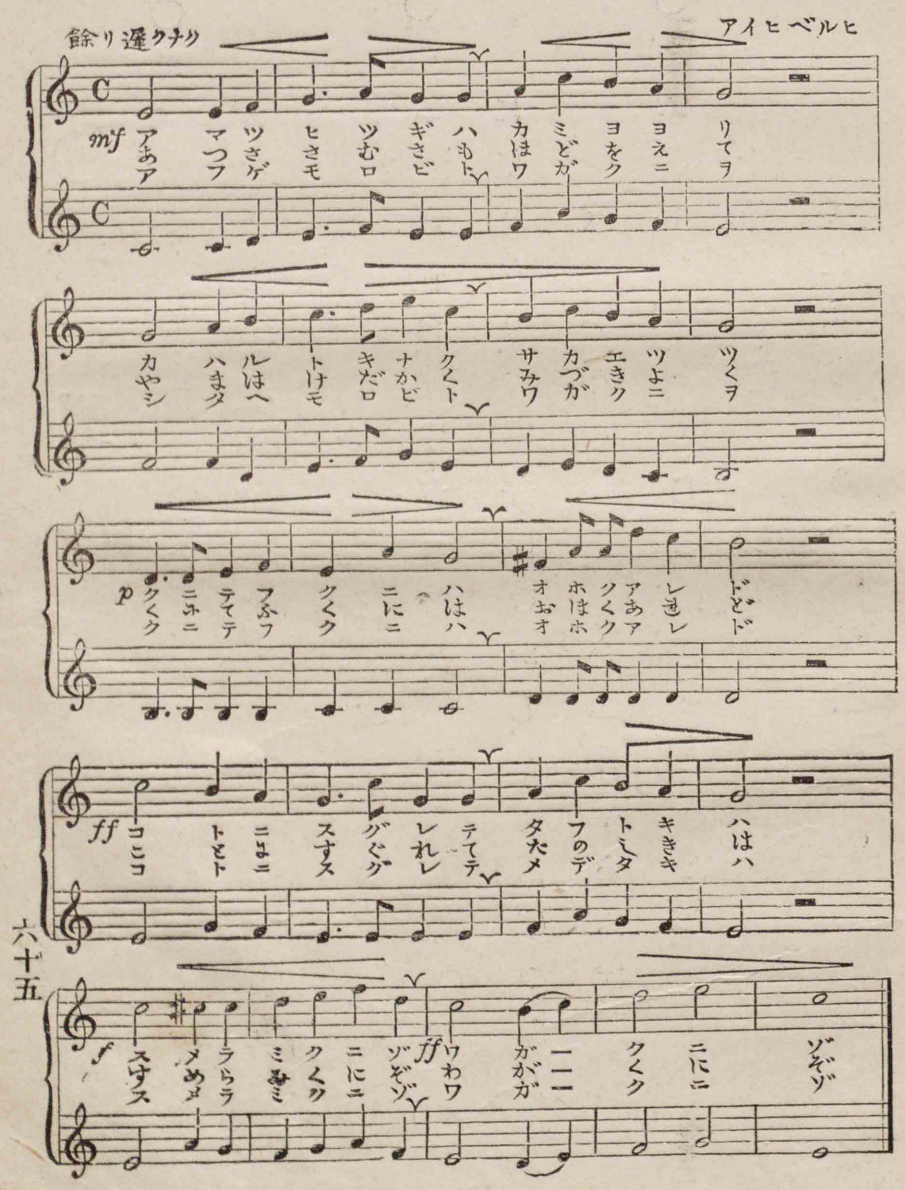
○天津日嗣

○天つ日つぎは、神代より、
かはる時なく、さかえつゝ、
國てふ國は、多くあれど、
ここにすぐれて、たふときは、
すめらみ國ぞ、わが國ぞ。」

○暑さ寒さも、程を得て、
山はけだかく、水きよく、
國てふ國は、多くあれど、
ここにすぐれて、たのしきは、
すめらみくにぞ、わが國ぞ。」

○あふげもろ人、わが國を、
したへもろびと、我國を
國てふ國は、多くあれど
ここにすぐれて、めでたきは、
すめらみくにぞ、わが國ぞ。」

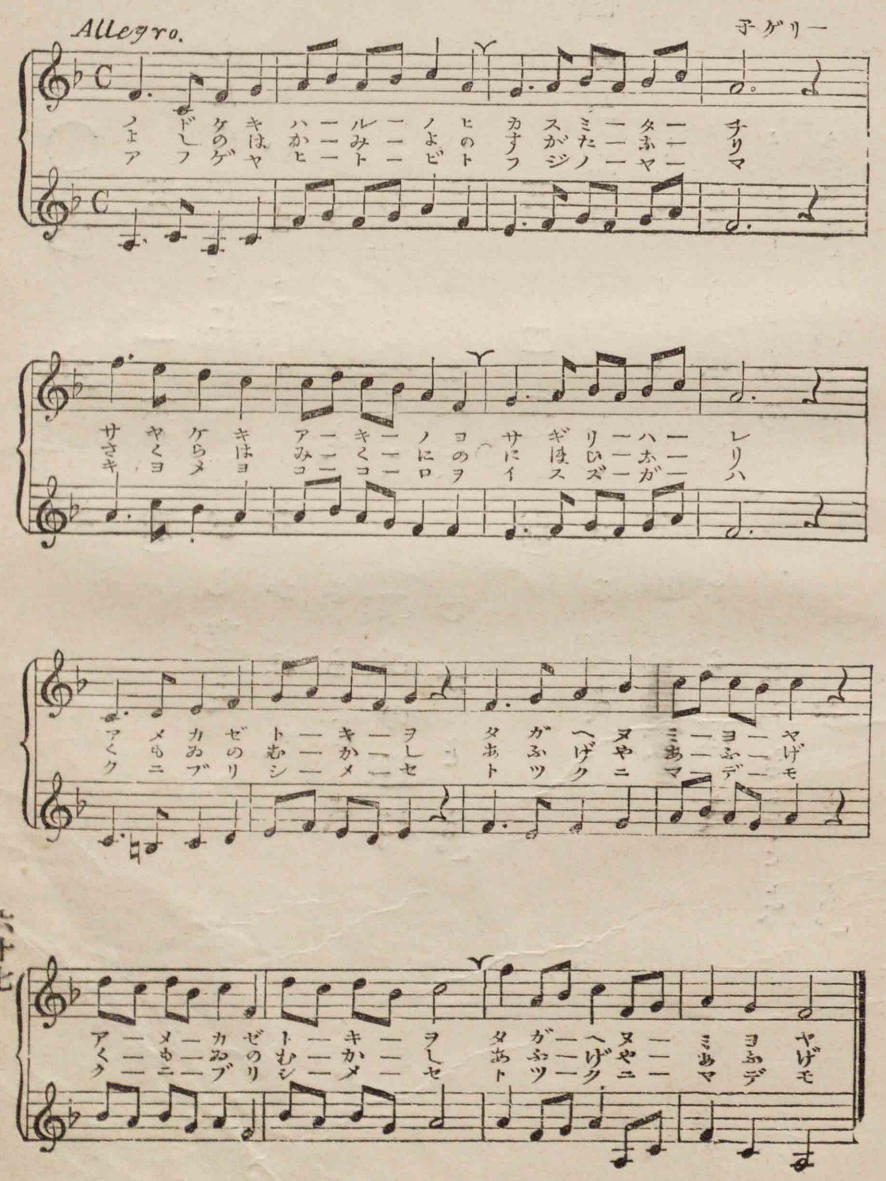
天津日嗣



○我國

○のどけき春の日、霞たち、　さやけき秋の夜、
　さぎりはれ、雨風時を、　たがへぬ御代や、
　雨風時を、たがへぬ御代や。」
○吉野は神代の、すがたなり、　櫻は皇國の、
　にほひなり、雲井のむかし、　あふげやあふげ、
　くもゐのむかし、あふげやあふげ。」
○あふげや人々、ふじの山、　きよめよ心を、
　五十鈴川、國ぶりしめせ、外國までも、
　くにぶりしめせ、外國までも。」

我國



○わかれ

其一（告別）

あしたにゆふべに、　睦びし友よ、
いまこそ、　わかれめ、
さらばよ、　さらばよ、
おん身を愛でゝ、　學びの道に、
いそしみたまへや、　わがとも。」

其二（送別）

桂のかぶりを、　かざせる友よ、
いましも、　わかれか、
さらばよ、　さらばよ、
うれしきものゝ、　かなしきことよ、
まさきくいませや、　わがとも。」

○送別（師に對す）

中村秋香

其一

をしむもかひなき、　こたびの別れ、
さらばや、　師の君、
さらばや、　師の君、
年月永く、　うけにし恩、
いづれの、　時にか、　忘れむ。」

其二

暑さに寒さに、　いとはせられて、
さらばや、　師の君、
さらばや、　師の君、
御國のために、　又世のために、
まさきく、　渡らせ、　給へや。」

○送別（友に對す）

中村秋香

其一

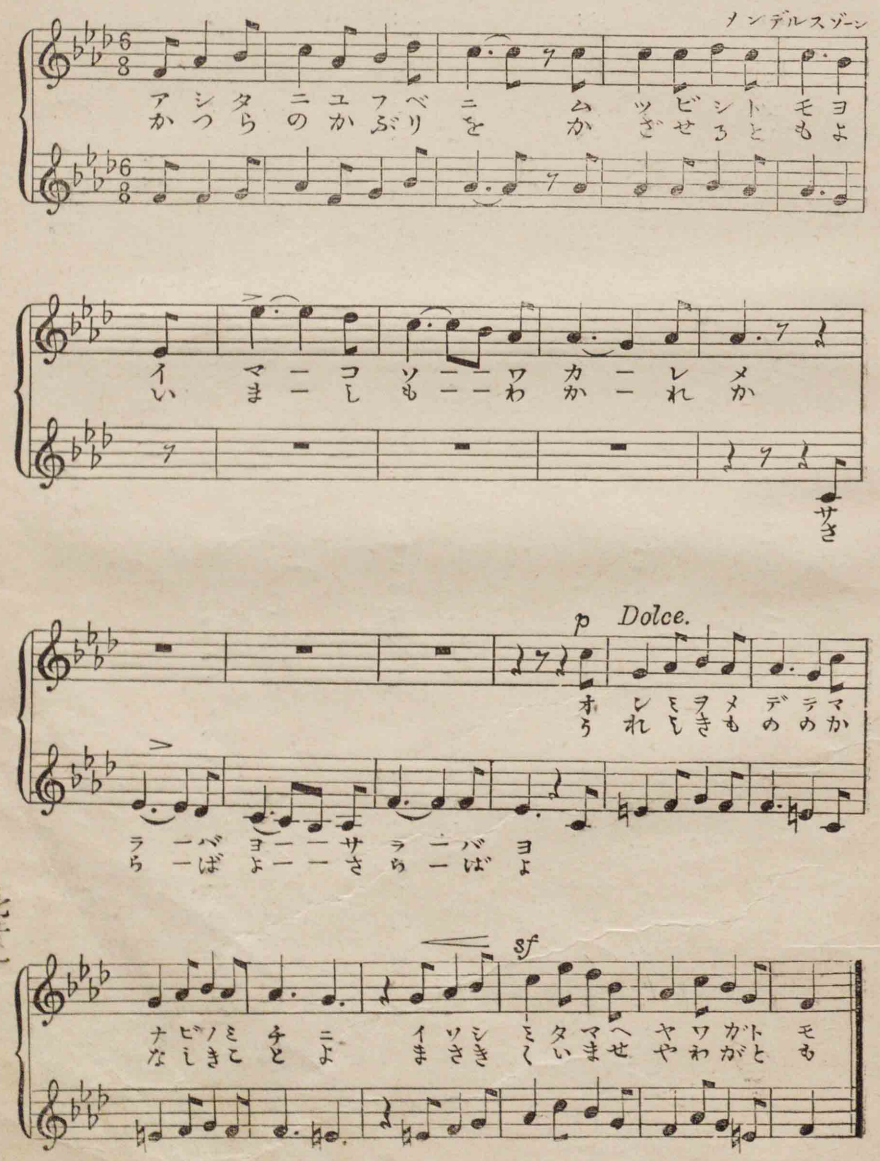
列ねし袂を、今こそわかて、
さらばよ、わが友、
さらばよ、わが友、
今日より後は、いづれの日にか、
ふたゝび、又あひ、見るべき。」

其二

あひ見でたがひに、年月經とも、
忘るな、わが友、
忘るな、わが友、
月雪花の、折々ごとに、
睦びし、日頃の、契を。」

わかれ

メンデルスゾーン



○ながれ

其一（仁）

ながれぞ、めでたき、山よりいでゝ、山をめぐみ、
野中をすぎて、野をうるほす、流ぞめでたき。」

其二（智）

ながれぞ、賢こき、あるひは直く、又はうねり、
地の理につきて、海を索む、流ぞかしこき。」

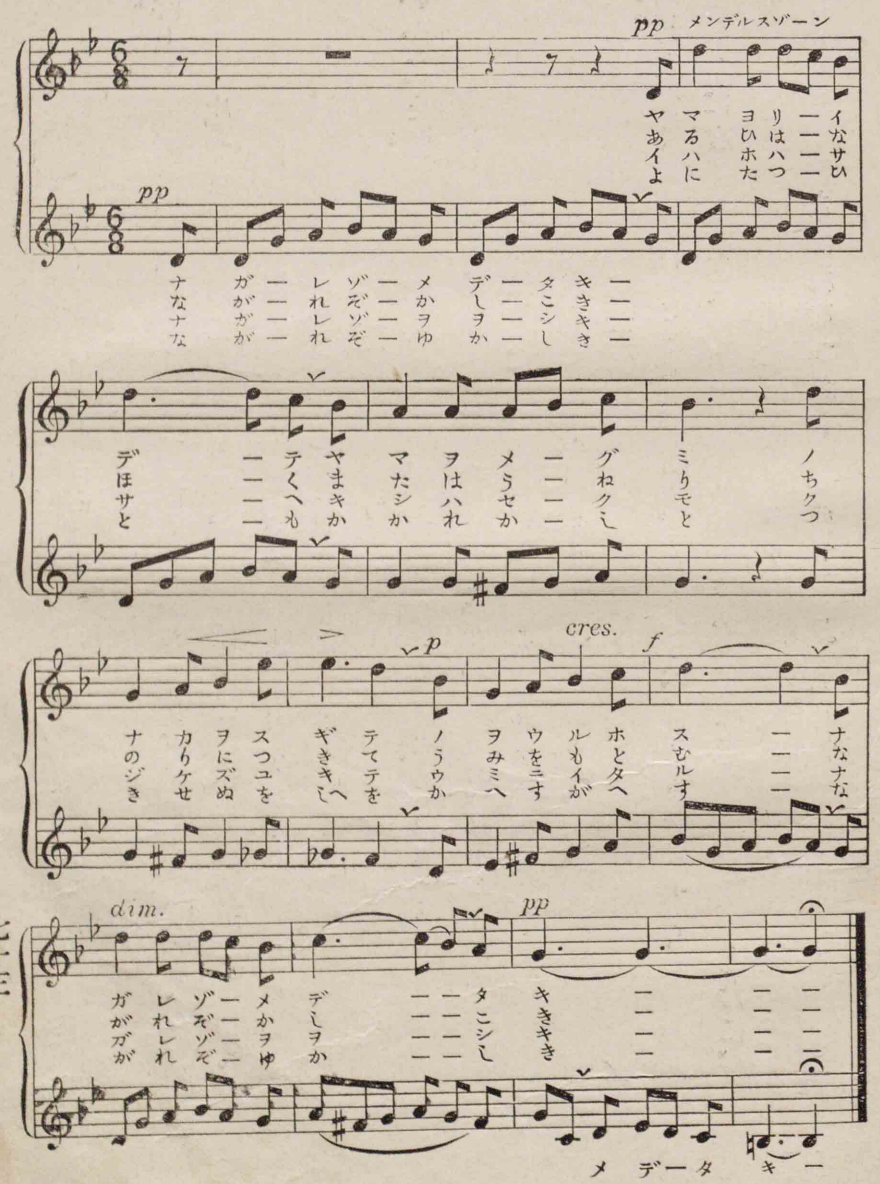
其三（勇）

ながれぞ、をゝしき、いはほは支へ、岸はせくも、
くじけず行きて、海にいたる、流ぞをゝしき。」

其四

ながれぞ、ゆかしき、世に立つ人も、かゝれかしと、
つきせぬ教訓を、返すぐ、流ぞゆかしき。」

ながれ



○「ポチ」が墓

東宮鐵眞呂

其一

降りしく雪に、いさみたちて、くるひしさまぞ、今もみゆる、
出づるに入るに、送りむかへ、ほえにし聲ぞ、耳にのこる、
あはれしたはし、「ポチ」よ「ポチ」よ、
あはれなつかし、「ポチ」よ「ポチ」よ。

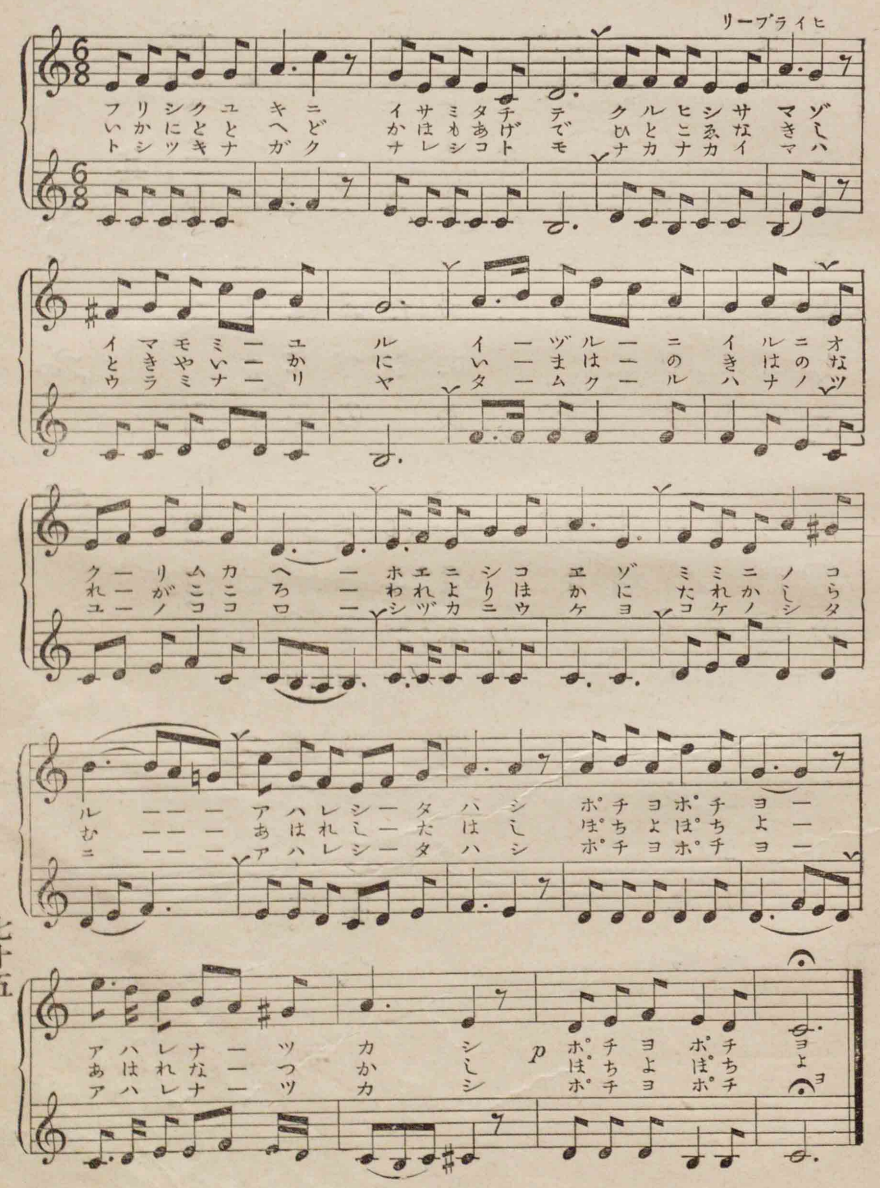
其二

いかにと問へど、顔もあげで、一聲なきし、時やいかに、
今はのきはの、なれが心、我より外に、たれかしらむ、
あはれしたはし、「ポチ」よ「ポチ」よ、
あはれなつかし、「ポチ」よ「ポチ」よ。

其三

年月ながく、なれしことも、なか〳〵今は、うらみなりや、
たむくる花の、つゆの心、しづかにうけよ、こけのしたに、
あはれしたはし、「ポチ」よ「ポチ」よ、
あはれなつかし、「ポチ」よ「ポチ」よ。

「ポチ」が墓



○あを雲

其一

○青雲たなびく、高山端山、
春べは花さき、秋べはもみづ、
(乙)あしたの色香、(甲)望みて仰げ、
(乙)ゆふべの匂ひ、(甲)頭挿して諷へ、
げにもめでたき、われらが幸、
よそよりけだかき、日本の國。

其二

○白妙さらせる、大川小川
水源はるかに、行末遠し、
(乙)ゆたけき流れ、(甲)眺望はつきず、
(乙)すがしき流れ、(甲)掬ぶもよしや、
實にも樂しき、われらが幸、
よそより清けき、瑞穂の國。

あを雲

Allegretto.

グムベルト

アーヲグモタ ナービークク カヤマハ ヤマ
しーろたへき らーせーるお ほかはを がほ

ハールベハハ ナーサーキア キベハモ ミヅし
みーるもとは るーかーホや くすゐと はし

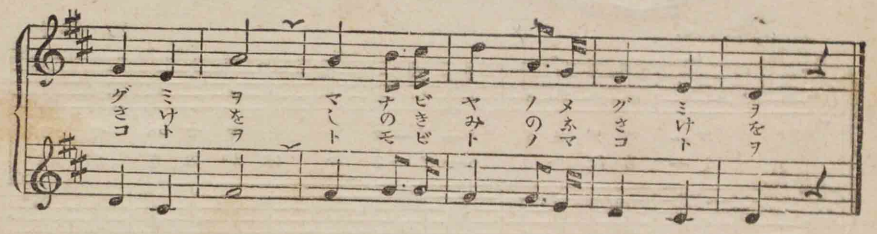
ノゾミテアフ ゲず カザシテウタ へや
ふがめはつき むすぶもよし

アシタノイロ カ ユフベノニホ ヒ ウタへや
ゐたけきふぶ れ すずしきなが れ よし

ゲニモメ デタキワ レラーガサ チ
げにもめ のしきわ をらーがさ ち

ヨソヨリケ ダカキヤ マトノクニ
よそよりき よけきみ づほのくに

○感謝



○雨の日も風の日も、安らかにまもられつ、
(乙)治まる御代の、(甲)光をうけて、
うれしくも、此處を去らむ、よしや今、
此所を去る學校の恩惠を。いかでわが忘るべき、
學びやのめぐみを。」

○寒き日も暑き日も、懇篤の教訓うけ、
(乙)行く末遠き、(甲)希望を持ちて、
うれしくも、此處を去らむ、よしや今、
此處を去るも、いかでわが忘るべき、
師の君の慈愛を。師のきみのなさけを。」

○哀しきも樂しきも、なぐさめついましめつ、
(乙)あまたの年を。(甲)事なく過ぎて、
うれしくも、此處を去らむ、よしや今、
此處を去るも、いかでわが忘るべき、
友人の信義を。ともびとのまことを。」

○青柳のいとより つごふ 子供らは、
春風の淡泊ぞ かれが こゝろなる。

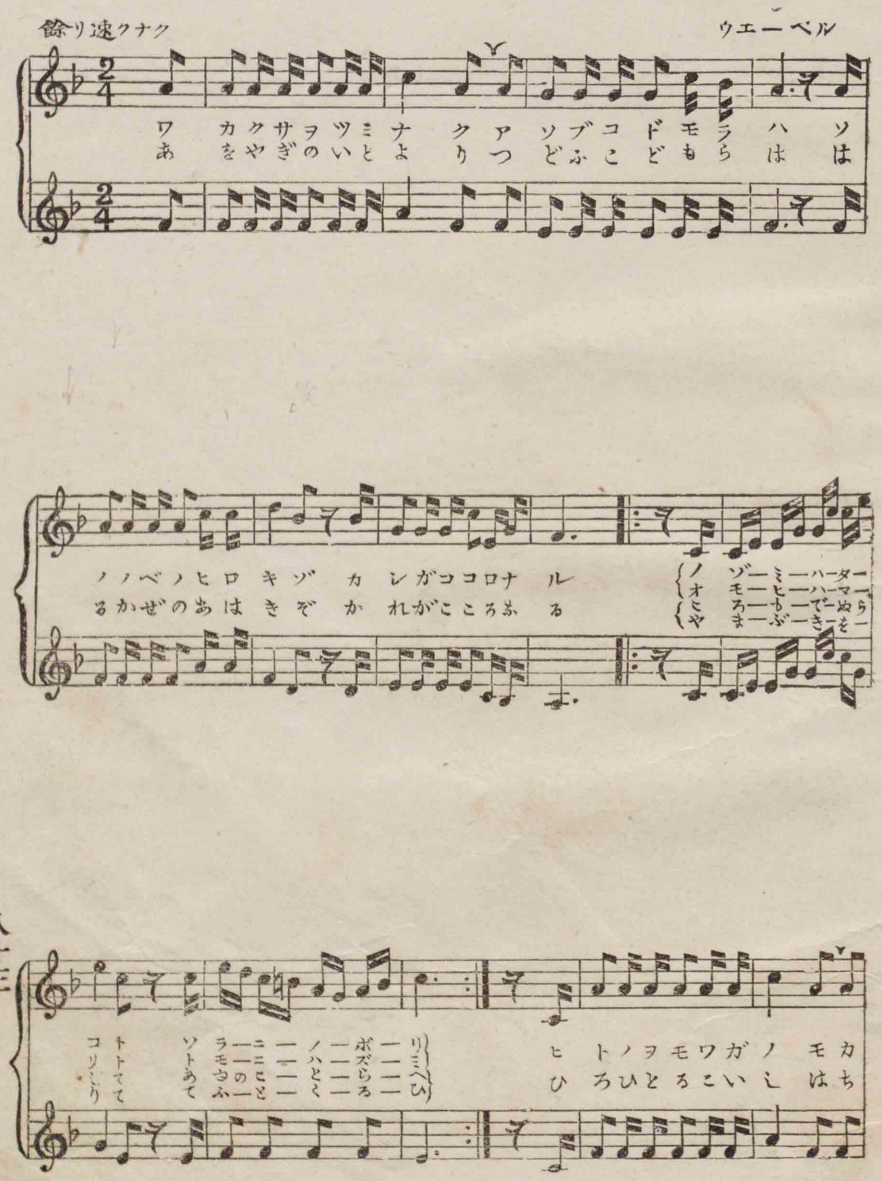
衣手ぬらして、鮎の子捕へ。
山吹折りて 蝶と 狂ひ。

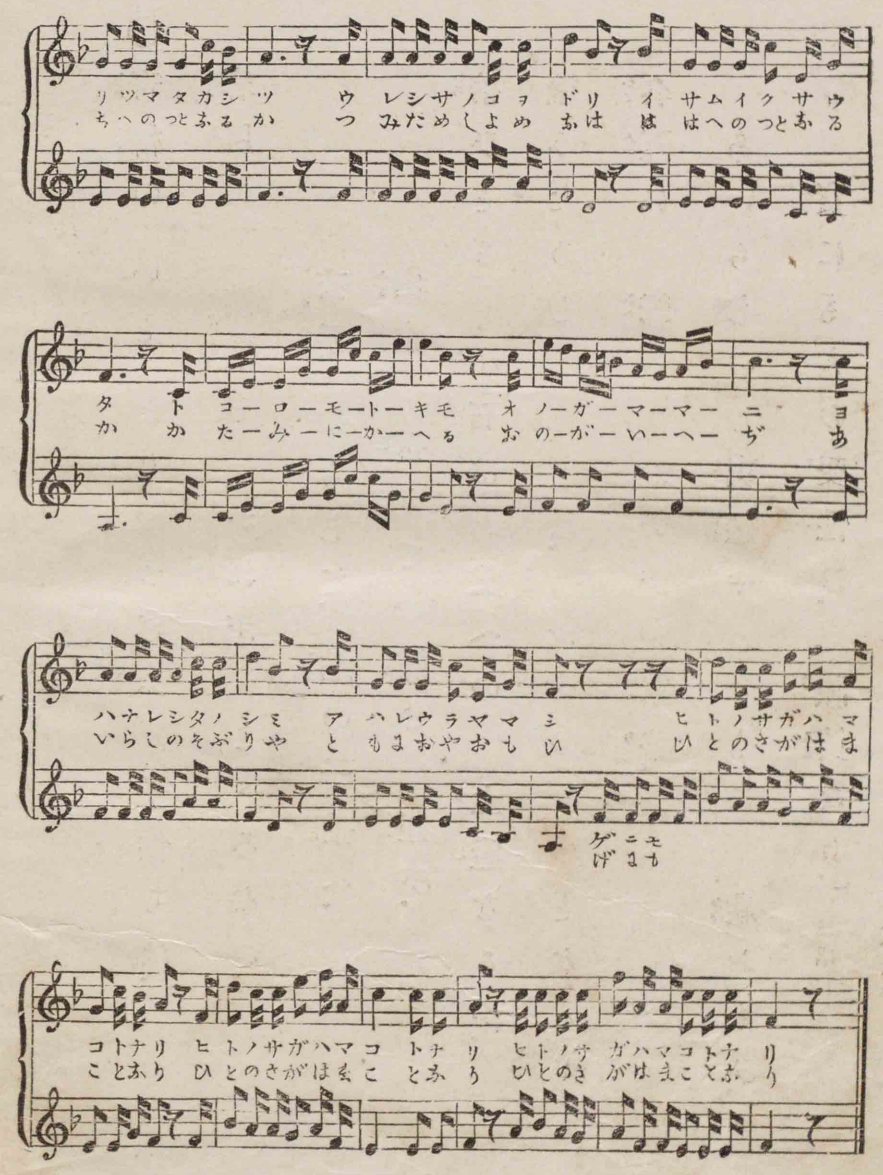
拾ひとる 小石は 父への 土産なるか。
摘みためし 嫁菜は、母への つとなるか。

各互に 歸る、おのが 家路。
あいらしの 素振やともに 親おもひ。」

實にも「人の受性は、誠眞なり。」三唱句

子　　供


餘リ速クナク
ウエーベル
ワ カクサヲツミナ クア ソブコドモラ ハ ソ
あ をやぎのいとよ りつ どふこどもら は は
ノノベノヒロ キゾ カ レガココロナ ル
るかぜのあは きぞ か れがこころふ る
ノ ゾーミーハーター
オ モーヒーハーマーぬら
ヒ ローヒーてーぬを
や ま ーぶ ーさ ー
ヒ トノヲモワガノ モカ
ひ ろひとるこいし はち
トトて ソトあて ラモふ ニニと ノハと ポズる リミ ひ
コリとり
八十三


リツマタカシツ ウ レシサノコヲ ドリ イ サムイクサウ
ちへのつとふる か つ みためしよめ ふは は はへのつとふる
タ ト コーローモートーキモ オノーガーマーマー ニ ヨ
か か たーみーにーかーへる おのーがーいーへー ぢ あ
ハナレシタノシミ ア ハレウラヤマミ ヒトノサガハマ
いらしのそぶりや と もまおやおもい ひとのさがはま
ゲ ニモ
げ まも
コトナリ ヒトノサガハマコ トナ リ ヒトノサ ガハマコトナ リ
ことふり ひとのさがはまこ とふ り ひとのさ がはまこ とふ り
八十二

著作權所有

刷	印	日	四	十	月	四	年	七	卅	治	明
行	發	日	八	十	月	四	年	七	卅		同
刷	印版	再日	七	廿	月	二	年	八	卅		同
行	發版	再日		三	月	三	年	八	卅		同
刷		七日	五	十	月	二	年	二十	四		同

定價金五拾錢

編者　東京市小石川區關口臺町五十七番地　小山作之助

發行者　東京市京橋區竹川町十三番地　白井直

印刷者　東京市京橋區築地三丁目十一番地　野村宗十郎

發行者　東京市京橋區竹川町十三番地　合資會社　共益商社樂器店　電話新橋五百貳拾九番　電話新橋四千八百八拾番

廣告

小山作之助編（文部省檢定濟）

重音唱歌集

第一　洋裝　定價金五拾錢
第二　美本　定價金七拾五錢　郵稅不要

本書ハ家庭ノ愉樂ニ供シ學校ノ教科ニ用ヰテ最適當セルモノニシテ第一集ハ二部ノ重音式唱歌第二集ハ三部ノ重音式唱歌ヲ收ム而シテ其多數ハ單音唱歌トシテ用ウルコトヲ得ルモノナリ

小山作之助編（文部省檢定濟）

輪唱歌集

全　洋裝　定價金參拾五錢
美本　郵稅金四錢

本書ハ二部三部及四部ノ輪唱歌ヲ精選集錄セルモノニシテ曲數三拾六凡テ家庭ノ愉樂ニ資シ學校ノ教科ニ充ツルニ適ス

小山作之助編（文部省檢定濟）

國教唱歌集

全　洋裝　定價金參拾錢
假綴　郵稅金四錢

本書ハ教育勅語ノ各綱ニ準ジテ類集編次セルモノニシテ普通學校ニ於ケル唱歌修身二科ノ聯絡ヲ緊密ナラシムルニ恰好ナル歌曲四拾有餘ヲ收ム

音樂書院編

國歌集

第一　美裝　定價金拾貳錢
第二　定價金拾五錢　郵稅金四錢

本書ハ歐洲諸國ノ國歌ヲ選擇編輯セルモノニシテ大國民ノ齊シク識ラザルベカラザル歌曲ナリ而シテ各國語ニハ我ガ假字ヲ附記シテ其發音ヲ明ニシ以テ獨修ニ便ス

7
7
類
號